

まともな千聖さんを返して（マジで）

黒ハム

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは頭がおかしく変態度が増した千聖さんと頭のネジがぶっ飛んでいる主人公の微笑ましい(?)お話です。

※以下のご了承の上、お読みください。

・本作品は『クールビューティーな紗夜さんを返して(涙)』のIFルートのな位置づけになります。一応、そちらを読まなくても楽しめるように心がけます。

・本作品はネタです。ネタ作品です。真面目な話がありません。寛容な心でお読みください。

- ・千聖さんが暴走しています。
- ・千聖さんがマジで暴走しています。
- ・ちなみに他のキャラもキャラ崩壊している方が何人かいます。
- ・多分、全員暴走しています。

『クールビューティーな紗夜さんを返して(涙)』はこちら。

↓<https://syosetu.org/novel/228>

455 /

目次

○○の秋	1
出会いを改竄してはいけない	9
あなたはどんなペットをご所望ですか？	22
疲れたときは癒やしが欲しい	31
嘘から始まる新たな関係	42
急に余所余所しくなると大体何かが起きている	49
番外編 ハロウィン	57
相談する相手を間違えたかもしれない	67
女神が○○になった日	77
合宿前日は波乱の連続	87
番外編 消えないで千聖！あなたが消えたらこの世界はどうなるの !? 慧人が必ず解決するからそれまで耐えていて！年末最後の最悪の 戦い勃発！……………年越しに何してんだこいつら？	103
辛いことは誰にでもある	110

〇〇の秋

皆様は〇〇の秋と聞かれたときに、真つ先に思い浮かべるのは何でしょうか？

食欲の秋？読書の秋？スポーツの秋？睡眠の秋？芸術の秋？

様々な秋があり、思い浮かべたものが不正解だと言えることはないだろう。

「ねえ、慧人。私思うの。秋はやっぱ性欲の秋じゃないかって」
「……………」

だからどれも不正解ではないと思うが、彼女の言葉を聞いたとき、俺はどう答えれば正しいのかよく分からない。

「聞ってるの？」
目の前の女性……………白鷺千聖しらさぎちやかとが黙り込んでしまった俺の顔を覗いてくる。

「白鷺千聖……………とある芸能事務所に所属する女子五人で結成されたガールズバンドユニット、Pastel*Palettesのベース担当。幼い頃から子役として活躍してきた、花咲川女子学園に通う高校二年生。容姿はとても整っており、可愛らしく、美少女という言葉がよく似合う」

「……………千聖。何で急に自己紹介したの？」

「ふふっ♪」応ね

「あと、腹黒いっっていうこと忘れてるぞ」

「そんな……………！私のお腹は黒くないわ……………！」
「……………あつそ」

「そして目の前に居る彼は冬木慧人ふゆきけいと。虎南高校に通う高校二年生で、CIRCLEでバイトをしている。現在、私とお付き合いしている男性である」

「ダウト。最後の一文はちげえよ馬鹿」

「そんな……………は……………！付き合うって……………ベットの上で激しく突き合っているっっていうこと」

「付き合っつてねえし、突き合っつてもいねえよ」

「そうね……慧人が突いて私が突かれる関係だったわ♪」

「そんな関係になつてねえよ」

「私はいつでも歓迎なのに」

そう言うと、俺の部屋で寝転がっている千聖は軽くスカートの端を持ち上げる。

「はいはい」

「興奮した?」

「誰がするかよ」

「といいながら心の中では興味津々。もつとその手を挙げてくれよ、と野獣のような眼差しで見つめて……」

「いねえから。勝手にねつ造するな」

呆れながら俺は外を見る。

俺とコイツの関係は強いて言えば悪友。別に身体の関係もねえし、恋人って訳でもない。ただの友人と呼ぶには色々と言弊がありそうだが、親友とは呼びたくないの、悪友というのが一番相応しい。「で、さっきの話なんだけど」

「さっき?」

「性欲の秋って話よ」

「……………」

出来れば戻りたくないってのが本音だ。

「その顔はどうしてそんなことを言い出したの? って顔ね」

「ちげえけど? 出来ればそんな話をしたくないって顔だよ」

「いいでしょう。これから白鷺千聖による『秋は性欲の秋が相応しい理由について』という講義を始めます」

「終わります」

「では、慧人。秋が性欲の秋……いえ、セッ○スの秋と呼ばれる理由について」

「ついに包み隠さなかったなこの野郎」

「いい慧人。ここからは真面目な話よ。しっかりとメモを取りなさい。テストに出るわよ?」

「なんのテストだよ」

「私お手製のテスト♪」

誰が受けるかそんなもん。

「ちなみに得点に応じて賞品が豪華になっていきます」

「安心しろ。テスト用紙もらった瞬間に突き返すから」

「0点は私と夜の個別レッスんね♪補習ということでマンツーマンの激しく絡み合いながら……」

「じゃ、放棄するわ。放棄すりゃ点数つかねえだろ」

「その場合は点数がつくまで何度も何度もやってもらいます」

「……………」

どうすりゃいいんだ？俺は。

「ねえ慧人。今、気付いたわ」

「何をだよ」

「さっきのつて着床するまで何度も何度もヤッてもらいますつていうのと似ていない？ほら、点数がつくのと受精卵が子宮内膜につくつてことで」

「……………」

あーどうでもいいなー

「こほん。秋というのは発情の季節なのよ」

「あ、いきなり話戻ったのか？そして、クソどうでもいい」

「もちろん、これは私自身が秋によく発情しているからって理由じゃないわ」

「は？そうじゃねえのか？」

「失礼ね。いい？秋は、男女ともに性欲につながるホルモンの分泌レベルが上昇するの。これは複数の研究であきらかになっていることよ」

「だから性欲が増す……発情するつてことか」

「そうね。そして、人間だけじゃなく他の動物も一緒なの。つまり秋は、人間だけでなく生物的に性欲が増す季節と言っているの」

「ほー」

意外と根拠がしつかりある話で驚いた。

「また、秋は精子が元気になるの。夏の間はどうしても暑さで精子が

減っちゃうけど、涼しくなってる行くにつれ精子も活性化するの」

「あー保健の授業で聞いた気がするわ。精子は暑さに弱いんだろ？」

「そうなの。だから涼しくなった秋は活性化する。そう、あなたのことにある」

「……」(ペシッ)

伸びてきた手を振り払う。

「ここに……」

「……」(ペシッ)

「(ハハ)……」

「……」(ペシッ)

三回に及ぶ攻防。千聖はジツとこちらを見てきた。

「いいじゃないの！ちよつとあなたの(ピーー)に触るぐらい！」

「ぜってえそれだけですまねえだろ」

「なっ……！そんな、私とその拍子にあなたを脱がして、あなたの(ピーー)を上下にしごいて勃起させ、そのまま流れるようにセ○クスに持ち込もうとか、そんなことするとでも!？」

「今の返答で信用するとでも?」

「そんな……酷いわ。何で信じてくれないの……?泣いちゃう」

「勝手に泣け」

「うわーん」(棒読み&嘘泣き)

「……」

「いっつ、どうしてくれよう。」

「ところで、慧人はどんな秋を思い浮かべるかしら」

「いきなり切り替わったな?うーん、やっぱり、運動の秋とか食欲の秋か?」

部活でサッカーをしているし、料理もよく作っているからな。その意味ではその二つが一番か?後は睡眠の秋か。授業中はちょうどいい涼しきで寝やすいからな。

「つまり……慧人もセック○の秋を推奨しているのね」

「どうしてそうなる?」

「運動……つまり、夜の運動がお盛んになっていく。目の前にいる私

をベットのうえで美味しくいただく……すなわち食欲を満たそうとする！つまりこれは慧人が○ツクスしたいと言ってるのと同義よ！」「ちげえよ？ちげえよ馬鹿？というかテメエを頂いても腹が膨れねえよ」

「……え？性欲が満たされるわよ？」

「食欲が満たされないんだよ」

「え？性欲が満たされればよくないの？」

「は？食欲を満たしたいんだよ」

「二つの欲を満たそうとするなんて……欲に塗れているわね」

「いや、満たしたいの食欲だし、欲に塗れていねえよ。というか、食欲は人間の三大欲求の一つだろうが」

「性欲も三大欲求の一つよ。あ、もしかしたら、三大欲求同士だし、互換性があるんじゃないかしら？」

「ねえよ。あるわけねえだろ」

「それは残念ね……」

誰でもいいから、こいつのねじ曲がった思考を変えてくれ？

「……あ、そう言えばさつき睡眠の秋もいって思ってたわよね？」

「……………」

ああ、神様。なんでコイツは人の心が読めるのでしょうか？

「愛の為せる業♪」

「お前、神じゃないだろ」

「で、睡眠って一字変えたら睡力——」

「これ以上言わせねえよ」

彼女の口元を左手で覆うようにして抑える。

少しすると何事もなかったように、両手で俺の左手をゆっくりと外した。

「——もう、どうせなら唇で塞いで欲しかったのに」

「やらねえよ」

「あ、それともあなたの（ピーー）を突っ込んでくれていいのよ？それで口を塞ぐ……ねえ慧人！それでいいのよ！寧ろそうして欲しいわ！」

「よくねえよ？何もよくねえよ？絶対やらねえからなおい」

「……確かに不公平ね」

「え？何が？」

「分かったわ。こうしましょう。あなたの口を塞ぎたいときに私はあなたの口に（ピーーー）を当てるわ」

「……………」

俺、二度とコイツの前で喋らない方がいいかもしれない。

「……さすがにハードルが高かったかしら？それなら、少し恥ずかしいけど……私のパンツを口に詰め込んで塞いであげるわ」

顔を少し紅くしながら言ってくる。どうしよう。この女のハードルが壊れている。いや、羞恥心も壊れている。どうしよう。誰かいいお医者さん知らない？

「まあ、一分の冗談はおいという」

「九割九分本気じゃねえかこのド変態」

「今日の夜ご飯は何かしら？」

「ん？何も決めていないけど」

「私は山芋とアスパラガスを使った料理を食べたいわ」

「へえー好きだっけ？それ」

「ううん」

「なら、どうしてその二つの食材をピンポイントで？」

「性欲を高める食材らしいの」

「……………」

「ついでに食後のデザートはバナナね」

どっちだろうか。この女だから形で責めるか、栄養で責めるか。

「私が目の前でいやらしく食べて、慧人の性欲を増すためってのはもちろんあるけど、バナナはミネラルと酵素が豊富なの。だから男性の性欲促進剤の働きをするわ」

両方だったか……

「そう思うとバナナって凄いわね。私が使えば慧人の性欲を増加させられるし、食べさせても性欲を増加させられる。……もしかして、バナナって神の食材なのでは？」

「なあ千聖。お前はきつと疲れているんだ。よし、休め。とにかく休め」

「どうしてそう思うの？平常運転じゃない」

「それを平常運転にしてほしくねえ……！」

あまりのことに頭を抱えていると、肩をツンツンされる。どうしたのだろうか？

「眠くなった」

「勝手に寝ろ」

「頭撫でて」

「甘えん坊か」

「いいじゃない。あなたにしか甘えないわ」

「へいへい」

人のベットの所で堂々と寝る彼女。布団まで被っているが、もう見慣れた光景としか言い様がない。全く……

「一時間経ったら起こしてね」

「りよーかい」

「もし、襲つてきても私は歓迎するわよ？」

「襲うわけねえだろ」

「そう？残念ね」

「普通は残念がらじやねえよ」

「好きよ。おやすみ」

「はいはい。おやすみ」

そう言いながら俺は優しく頭を撫でる。

普段は最初の方で本人も言っていたが、彼女は多忙な人間。芸能界という俺の想像できないような世界ではきつと、コイツの中にも押さえつけているものがいろいろとあるのだろう。

だからまあ、彼女がこうして何の気兼ねもなくいられる環境は大事だろうし、それが俺の前になったからといって、彼女を嫌ったり邪険にしすぎることもしない。

ただまあ……

「夕食は納豆を出すからな」

この後、夕食時に本当に納豆を出したら、凄く嫌そうな顔をして
たことを記す。

出会いを改竄してはいけない

私、白鷺千聖と冬木慧人の出会いは桜舞い散る春のことだった。

「いけないわ。このままだと遅刻してしまうわ」

晴れて高校生になったその日。前日に仕事の都合で少し帰るのが遅くなってしまい、少し寝坊してしまった。そのため、少し走って学校に向かっている。

「きやつー！」

曲がり角で誰かとぶつかってしまい、その拍子に尻餅をついてしまう。

「いたた……」

「大丈夫か？」

「あ、ごめんなさい。前を見ていなくて……」

差し伸べられた手を掴み立ち上がる。

「悪い。俺の方こそ見ていなかった」

彼は少しばつが悪そうに頬を掻きながら、謝ってくる。

「いえ、私が走ってぶつかってしまっただけだから……」

背は私よりも高く、見上げれば、春まで残っている雪のような鈍い白さを持つその髪と整った顔立ち、目は鋭く私を貫いているようである……

「怪我はないか？」

一瞬、急いでいることも忘れ、私は彼に見惚れていた。

「は、はい……」

「じゃあ、行くから」

「あ、あの……」

彼がここから去ろうとしたとき、私は反射的に彼の手を握っていた。そして……

「あなたの名前は……？」

「誰だよそいつ」

「え？あなたのことよ？」

「いや、そんな出会い方じゃなかっただろうが」

目の前で千聖が何か喋っていた。何というか……恋愛漫画とかでのテンプレ過ぎて逆にあまり見ないような出会い方……うん。そんな出会いしてねえから。

「あれ？こんな感じじゃなかったかしら？」

「全然違うだろ阿呆が」

「……おかしいわね」

おかしいのはお前の頭だ。そう思いながら俺は宿題を進める。

そんな曲がり角でぶつかってなんてあるわけねえだろ。まあ、曲がり角ではないが、ぶつかって出会ったのは花音くらいだ。

パチンツ！

「分かったわ。こんな感じよ」

指パッチンからのキメ顔。なんだろう。凄い嫌な予感がしてきた……

「なあ？いいだろ？ちよつと付き合ってくれよ」

「いえ、結構です」

「そんなこと言わずにさー」

とある休日のショッピングモール。私はよくあるチャライ男の人たちに絡まれていた。

知っている人がほとんどだと思うけど、私は事務所に所属している所謂芸能人。身バレしないようにある程度変装はしているものの、私から溢れ出るオーラは隠しきれないらしい。現に仕事もオフで一人でショッピングを楽しもうとしているのにコレである。

「私、急いでいますので。これで」

相手の考えは見え見え。そのまま数人で囲んで私を逃がさないようにしているのでしょう。相手は私を一般の女子高生と思っているだろうが、私が芸能人だとバレれば、きつと……

「いいじゃねえかよー！」

「きゃっ！」

一人が無理やり腕を掴んでくる。相手は男。振りほどこうにも力が強くて振りほどけない。

「少しお茶に付き合ってもらっただけだからよ……」

「離して……！」

周りにいた男の人たちも無理やり連れて行こうとその手を伸ばし

……

「おい」

その手は別の人が現れたことによつて振り払われた。

「触んなよ」

「あ？何を言つてててててっ!?お、折れる!」

静かに現れた男は、私を掴んでいた男の腕を掴む。力が強かったのか簡単に腕は放される。

そして、私はあることを思いつく。

「もう、遅かったじゃないの。お陰で変なのに絡まれたじゃない」

現れた男の人に視線を送る。当然だが私はこの人を待っていた訳でもないし、そもそも知り合いではない。ただ、穏便に済ませるにはこうするのが一番だと考えたからだ。

「……悪い。遅くなった」

ぶつきらぼうに言い捨てる彼。どうやら意図に気付いてくれたようだ。そして……

「俺の女に手を出したヤツは潰す」

右手を前に出し、ひねり潰すような仕草を見せる。彼の圧に怯んだ男の人たちは逃げるように去って行く。

「……ありがとう。助かったわ」

彼らが見えなくなったところでお礼を言う。

「別に。礼を言われるようなことはしてない」

そう言い残すと、その場を立ち去る彼。

そして、次の日……

「今日から転校生がこのクラスにやってきました」

昨日の人には感謝し切れていない、それなのに何処の誰かが分からず感謝することが出来ないというもどかしさを感じながら朝のHRに出席していた。どうやら転校生が来るらしいが、興味ない……そうさつきまで思っていた。彼が入るまでは。

「じゃあ、自己紹介を」

「……冬木慧人。よろしく」

「……あ」

これが彼との出会い。そして彼との関係の始まりだった……

「わけがねえだろうが」

俺はペンを置きながらそう答える。嫌な予感が的中したよおい。

「お前、自分が通ってる学校名言ってみろ?」

「花咲川学園ね」

「アホか。花咲川女子学園だろうが」

「……え?」

「何で男の俺が転校生として現れるんだよ」

「ついでに言えば、俺は近くの男子校もどきの普通科高校に通っている。」

「それはほら?よくある共学化になったからじゃないの?」

「いや、そんな話は聞いたことねえよ?」

「そ、そんな……!ま、まさか……本当は慧人って女の子なの?」

「いや、なんでそうなる?」

「ボーイッシュな女の子なの?」

「いや、男だからな?」

「訳あって男として育てられたの?」

「いや、違うけど?」

「でも、慧人。よく考えてちょうだい」

「何だよ」

「あなたは目の前の人の性別をどう判断しているかしら？」

「オーラ、雰囲気、空気」

「……………」

「どうした？頭抱えて？」

（ああ、そう言えばこの男は頭おかしかったわね…………）

何を言っているのだろうか？人なんてオーラを見れば、年齢性別仕事の業種、パチンコや競馬などのギャンブルにいくらつき込んでどれだけ負けているかに、敵意を持つとか大体分かるだろ？

（…………どうしたら、相手を見ただけでギャンブルにいくらつき込んで、しかも負けているのが分かるのかしら…………？絶妙に…………いえ、クソほどもいらぬ能力ね）

「……………普通の人はね。見た目とか声とか仕草とかね？そうやって答えると思うの」

「はあ……………で？」

「つまり、慧人が男であることを知るにはね？100%男ですつていう証拠が必要な。それか、男だという証明ね」

「学生証でいいか？健康保険証でもいいけど…………ああ悪い。運転免許証はまだ持っていないんだ」

「甘いわ。私はそれらが偽造されている可能性も考えて…………」

「いや、偽造って結構ヤバイこと言ってるぞ？」

「…………慧人の裸を見る義務があるわ」

「ねえよ」

「…………裸を見たいわ」

「見せねえよ」

「…………（ピーー）したいわ」

「しねえよ」

「…………はっ！今、思い出したわ！私と慧人との関係！」

「いや、悪友だろ」

「そう。あれは10年前…………」

「やめろ。回想シーン行くんじゃないやねえよ？ちよつ、10年前なんて俺

ら会ってないから回想するものがねえんだよ？ねえ聞いてる？おい、聞けやコラ」

「ほんとうに……いつちやうの？」

白鷺千聖、当時7歳。そこはとある空港で、私はある男の子を見送っていた。

「うん……しかたないよ。しごとだつて」

冬木慧人、当時6歳。幼い頃から一緒に遊んでいた彼が今日、遠くに行ってしまう。

「わたし……はなれたくない。もっと、いつしよに……！」

「だめだよ。わがままいつちや」

幼い私は涙を浮かべている。幼い慧人も少しだけ涙を流している。

「でも……」

「いつか……おおきくなったらさ。またあおう？」

「ほんとうに……？」

「うん。ぜつたいにあう。やくそくするよ」

「じゃあ！もういちどあえたらそのときは……わたしをおよめさんにしてくれるっ？」

「もちろん」

そしてお互いの小指を絡め、契りを交わす。

そのまま慧人は両親に連れられ、飛行機に乗っていった。

それから10年。ついに私たちは再会して……

「……おかしいわね。再会したのに私、プロポーズをされていないわ」

「それは、そんな約束をしてねえからだよ」

「私はこんなにも、あなたのことが好きなのに？」

「いや、そうだとしても……いくつかステップを飛ばしたなおい」

「そうなのね……慧人は引越し先で記憶を失ったのね……私と愛し合った記憶も消えたのね……」

「うん。ちげえからな？元から存在していないからな？」

「そうなのね……きつと私と（ピーー）をすれば全てを思い出すわ」

「だから、思い出すものがねえんだよ。というか、何で思い出す方法が（ピーー）なんだよ」

「……したいから？」

「テメエの欲望じゃねえか」

「……もう、私じゃなかったらきつと狂っていたわよ？愛し合った思

い出をなかつたことにされて……これは、ヤンデレメンヘラ無理心中ルートの一緒のお墓に入ってBADEND待ったなしよ?」

「そこまで行くか?というか、それで狂われていたら、俺は記憶の改竄をした馬鹿野郎を腕の立つ医者に診せに行かせる必要が出てくるんだが?」

「医者……産婦人科の?」

「精神科か脳外科か小児科」

「小児科とは失礼ね!いくら私の身体が貧相で胸も背もそこまで大きくない。身体的な魅力がなくて、子どもでも通じそうだからって、それはないわ!」

「いや、行けると思うけど?ワンチャン行けるだろ」

「……………慧人」

「なんだよ」

「…………私って小児科がお似合いの女なのね」

すると先ほどまでの勢いはどこへやら、若干落ち込んでいる様子だ。

「…………悪い、言い過ぎた。お前の身体は子どもかもしれねえけど。頭は高校生だし、心はそれ以上だったな」

「そ、そうよね!性的な知識なら他の人の何倍も学習している自信があるもの!」

「待て。何で余計な枕詞がついた?」

「え?だ、だって…………あなたと話すためには、いくらあっても足りないから…………」

「足りてないのはお前の常識だド阿呆」

「失礼ね!足りてないのはあなたとの実践経験だけよ!」

「足りていなくていいわそんなの」

「酷いわ…………(シクシク)」

嘘泣きをしている彼女は放っておこう、そうしよう。

「……………はあ」

すると一段落ついたのか、ため息をつく。ようやく流れが途切れたので、気になったことを聞いてみる。

「で？さっきのクソみてえな偽造の過去話が何にどう繋がるんだ」

「私たちは幼馴染みななのよ」

「お前の妄想の中ではな」

「結婚を決めた関係なのよ」

「お前の頭の中ではな」

「つまり、私には慧人の成長をこの目で見る義務があるのよ」

「ねえよ」

「じゃあ……私の成長を確認する？」

そう言つて服の端をつまむ千聖。

「興味ねえよ」

「……………（シユン）」

すると、悲しい表情を浮かべる千聖。何だろう。そんな彼女を見ていると罪悪感が……

「…………ハッ」

わかねえわ。というか、よく考えなくてもこのド変態、俺と会った時から別に劇的な変貌を遂げていないし。

「……いいわ、絶対に脱がせてみせるわ。あなたは私の性欲に火をつけたのよ」

「火をつけるところ間違つてねえか？」

「そうね。あなたは私の面倒くさいところに……つて、誰が面倒くさいのよー！」

「自分で言つたんじゃねえか!?……つて、ちよつ、ズボンに手をかけるなこのド変態。いや、どさくさに紛れてどこ掴もうとしているんだおーいー！」

「あなたの（ピーー）」

「よし。よく考えろ？もし、俺がお前の胸とか（ピーー）を触ろうとしたら……」

「興奮するわ！むしろ触って欲しいわね！」

「……………」

終わった……この女はダメかもしれないねえ。

「ねえ、触ってくれるんでしょ？ねえ触つて……ほらあなたの

(ピーー)を頑張って私の胸で挟んでみたりとか……ねえしましよ
よ。しましよようよ慧人。ここからは保健体育の実技の時間よ」

「しねえからな。しねえから、そんな哀しそうな顔をするんじゃない
よ」

「じゃあ、慰めるついでに(ピーー)を……」

「しねえよ」

この後、不毛な言い争いは数時間続いた。

本当に、なんであんな出会いからこんな関係になったんだろうな。

彼女との出会いは去年の秋だった。

「花音から離れなさいっ!」

店と店の間にある、人目に付かないような狭い路地。そこには泣い
ている松原花音と、俺がいた。

「ふえ?千聖ちゃん……?」

「来て花音。……あなた、花音に何したの?」

「何したの?って言われてもなあ……」

「あなたが花音を泣かせたのでしょ?」

……まあね?これだけ見たら、普通俺が泣かせたって思うよね?

やってきた千聖もそう思ったわけである。

「あ、あの……冬木さんは……迷った私を案内しよう……」

「いいのよ花音。脅されてるいるのでしょう?」

「ち、ちが……」

「あーそういうことか」

で、この時点で俺は千聖が勘違いしたのを察した。察したのはいいんだが……

「なあ?もし脅しているって言ったらどうする?」

この時の俺はちよつと頭がおかしかったのだ。え?今もおかしいって?オイコラめるぞ。

この後、怒る千聖を花音が抑え、誤解と説明。泣いていたのは単純に目にゴミが入ったこと。俺のもしもの話は単純に反応が気になったということを説明したのだ。俺って凄いな、ほんと。

「ごめんなさい。先ほどは失礼しました」

場所を移しカフェにて。千聖が頭を下げて謝ってくる。

「……………」

ただ、この時の俺は理解が出来ていなかったのだ。

「なあ、花音。何でコイツ謝ってるの?」

「それは不快な思いをさせたのだから謝るのが当然でしょう?」

「そういうもんなのか?お前は花音を助けようとした。そこに謝る要素なんてなくね?」

「いや、あなたが不快な思いを……」

「別に何もねえけど……」

千聖の行動は結果的には勘違いだった。それでも、見た目が怖そう
で、路地裏という他の助けが期待できない場所。そんな状況で、友人
のために声を荒げた彼女を俺は、賞賛こそあれ不快だとかそういう気
持ちはなかったのだ。

だからこそ、彼女のとつた行動は勘違いであるものの、俺にとって
は格好良く見えたのだ。

「じゃ、花音はお前に任せるわ。俺、これからバイト行ってくるんで」
そして、そのままバイト先へ向かう。バイトがあるのは別に、逃げ

るための嘘とかそういうわけじゃないからだ。

この日を境に彼女との交流を深めていくが、間違いなく言えるのは、千聖は俺を嫌っていたこと。そして、俺はこの時、少しだけ白鷺千聖という人間に興味が湧いたことだろうか。

あなたはどんなペットをご所望ですか？

ペット。飼っている、飼っていない、飼いたい、飼うことが出来ないなど、様々な人たちがいるだろう。

ペットと聞くと個人的には犬とか猫とかを飼う人が多い印象。後は、観賞用の魚とかハムスターとかウサギとかもだろうか。飼う人によって、種類や数も異なってくるだろう。

ちなみにだが現状、我が家ではペットを飼っていない。だから、もし大人になって、そこそこの給料が安定して手に入ったら、何かしらのペットを飼いたいと思う。その時の候補だが……

「私はアレルギーがないから心配ないわ」

そうそう。特に一人暮らしでなく、誰かと暮らしている場合は相手のことを思いやる必要がある。例えば、犬アレルギーや猫アレルギーなど、アレルギーを持つている人が居るとペットを飼うのは厳しい……というより、相手の体質を考えなくてはいけないだろう。ペットを飼いたいと簡単に言っても、好みだけではなく、体質や環境など諸々を考えないといけないのだ。

余談だが、俺はイヌ派かネコ派と問われたときに、ハリネズミ派と答えるタイプなので、一番飼いたいのはハリネズミだったりする。え？何でって？ハリネズミって無茶苦茶可愛くない？それにほら、手のひらサイズだし……

ツンツン

「どうした？」

「ほら。私、可愛い」

「そうだな」

「手のひらサイズ」

「いや、それは無理があるだろ」

「……胸の大きさが（；▽；） ジーン」

「……………（・▽・）っ□ 涙拭けよ」

「……（T T T）アリガトウ」

涙を拭く千聖。ところで、どうしてこの馬鹿は急に自虐ネタを挟ん

だろうか？

「……そうよね。慧人はもっとビツクな方が嬉しいよね……」

「誰もそんなこと言っていないけど？というか、サラツと俺の心の中を読んでいたなおい」

「あら？私ともなると、相手の顔を見るだけで相手の考えていることが手に取るように分かるのよ」

「うわー……やっぱり筒抜けと言うことか。前から思っていたけど厄介なおい。」

「そういうことね。でも、どうして急にペットなんて言い出したの？」

「いやさ……最近、癒やしが欲しいなーって思ってた」

「ここに癒やし粹がいるじゃないσ（ω・Me）」

「テメエはド変態粹だよ」

「つまり……性欲発散粹（ω・ω）？」

「お前が勝手に発散しているだけだろ」

「じゃあ、慧人も性欲を発散しましょう！」

「お断りだ」

「ええー私はいつでもウエルカムよ？」

「はいはい」

そう思いながら、俺たちは歩を進める。

いつも通り変態発言が飛んでくるが、あくまでここは外。いくら彼女自身が変装しているとはいえ……まあ、バレたら色んな意味でアウトだろう。

「だって、あなたのことが好きだから……（／ω＼）ハズカシーイ」

恥ずかしがっている彼女。なんだろう……うんまあ、

「さっさと行くぞ」

こういうときは、無視するに限る。

軽く彼女の存在を無視しながら、目的地に到着。え？目的地が何処かって？この話の流れから分かるかもしれないが……

『いらっしやいませー』

ペットショップである。近くにあるペットショップにやってきたのである。

ちなみにこのペットショップは、犬や猫、小動物などが近隣の他のペットショップに比べ、たくさん居る。

ここに来ると時々、Roseliaの氷川紗夜さんひかわさよや湊友希那さんみなとゆきな、Poppin', Partyの花園たえなどはなそのに遭遇する。それぞれ、犬、猫、うさぎを見に来ているようだが……

「まあ、人のこと言えないよな」

俺は俺でハリネズミを見に来ている。やっぱり好きな動物を見るっていいよな。

(凄いわね……バレないようにしているかもしれないけど、口角がいつもより数ミリあがっているわ。それに、いつもより僅かに目も細めているし……これは上機嫌ね)

「……ん？どうした？お前は動物たちを見なくていいのか？」

「ええ、大丈夫よ。とてもいいものを見させてもらっているわ」

「???そうか?」

俺は視線を気にすることなく、はりねずみたちを見ている。ああ……可愛い。

(ふっふっくん。これは中々レアな写真ね。リサちゃん辺りにも送っておこうかしら?タイトルは、ご機嫌な慧人つと……あ、いいもの見つけたわ)

夜。いつも通り彼女を家まで送っていく。やっぱり、いくらド変態であつても、どうしようもなく頭の中身が終わつていても、女子がこんな遅い時間に一人というのは気が引ける。

「ねえ慧人……コレ持つて」

「あ？……なんだこれ？チエーンか？」

いきなり渡されたチエーンみたいなもの。その繋がっている先を見たと……

「……………」

「ふふっ♪これで私も正式な慧人のペットね♪」

何故か千聖の首に付いていた首輪だった。一瞬、何も理解できなくて思考が停止する。

そして、停止していた思考が動き出した。

「やめろ!? すぎえ恐怖を感じただけ!? というか外せ!？」

「嫌よー私はあなたのペットなのよ!」

「マジでやめろ!? こんな誰かに見られたら……」

首輪を外そうと千聖の首元に手をやる。と、その時どこからか視線を感じる。しまった。コイツに気を取られていたが、よく考えたら、さつきから人の気配がしているんだった。

「……………」

「……………」

その視線と目が合った。なんだろう。とりあえず、笑顔で挨拶すればいいのかな？

「こんばんはー（爽やかなスマイル付きー）」

prrrrr

すると、男の人はこちらに背を向けて、前屈みになる。そして、

「もしもし警察ですか？ はい。男の人が女の子に首輪をつけて暴行を……」

「誤解だチクショウ!」

千聖を抱えながらダツシユでその場を離れた。

数分後。

「ここまで離ればいいか……?」

近くに人の気配はほぼない。いや、家の中とかは普通にあるけど、外に出ている人の気配はない。

「ねえ、慧人……」

「どうした? 疲れたとかか?」

「……ちよつと興奮した(´▽´*)ポツ」

「……………」

どうしようこのド変態。ここで捨てるべきか?

「いやよ……何でもするから捨てないでご主人様……!」

首輪をつけて、捨てられそうな子犬のような目で見てくる。息づかいはどこか荒く、顔が紅くなっており……

「……………」

どうしようか。何だか、そういうプレイをしているようにしか見えないんだけど? ちなみに相手は人気急上昇中のアイドルグループのメンバーです。

「(ピーー)も(バキューン)も(ドーン)も何でもするから……!」

「じゃあ、今すぐその変態思考を治せ」

「無理ね。何でもすると言ったけど、何でも出来るとは言っていないわ

(——ω——)?ドヤツ」

誰か腕のいいお医者さんを教えてください……

「……………じゃあ、首輪を外せ」

「慧人が外して♪」

「……………首出せ」

ということで見ると……あー意外と凝った作りしているんだな……じゃねえな。感心している場合じゃねえわ。

「ほらよ」

「ありがと♪今度からは二人きりの時に付けるわね♪」

「……………もう好きにしろ」

いつになく上機嫌だなあ。……外でやらないなら何でもいいわ(諦め)

「はい♪あ、ついでにブラのホックは外さなくていいの？」

「外さねえよ」

「パンツは？」

「脱がさねえよ」

「……慧人になら脱がされてもいいのに……」

「やるかよ」

「ちなみに今日の下着の色は透明よ♪」

「あっそ。………は？」

ちよつと待て。なんて言ったこのド変態？

「ふふっ。どういう意味かしらね？」

口元に手をやって笑みを浮かべる彼女。

………どうしたらよいのだろうか？とりあえず、警察に突き出すべきか？いや待て。ヤツの口車に乗せられてはいけない。おかしいだら？脱がされてもいいと言っているヤツが何も付けてないわけがない。つまり、大丈夫だ。大丈夫なはずだ。というか、警察に突き出すと言つてもどうやって？『パンツを脱がそうとしたらはいてませんでした』とでも言うのか？そもそも、首輪が見つかった時点でアウトだし……

「……慧人。あなたの負けよ」

そつと耳元で囁かれた言葉。……クソが……！認めたくない……認めたくないが……！

「……へいへい」

今回はどうしようもない。確かめようとするだけで一発アウト。更に、警察とかの権力も使えない。「ふふっ、負けた慧人には私、千聖さんをペットにする義務が与えられます」

「お断りします」

「わんわん♪」

「お引き取り願います」

「くうく……」

「お気持ちだけで結構です」

「……………(シユン)」

「……帰るぞ。バカやってないで」

「あ、今一瞬『可愛い』って思ったんでしょ？少し間があつたものね」
「……………ここに置いてくぞ」

「凶星ね。ふふっ、それとも可哀想な表情の方が抜けるかしら？」
「るっせえ、しばくぞ」

「慧人にしばかれるなら大歓迎よ！」

「……………」

無敵か？コイツは無敵なのか？

「あ、違うわね。慧人の性癖的には、ううっ……………しばかないでください
……………(チラツチラツ)」

「勝手に人の性癖にすんじやねえよこのド変態」

「知ってるかしら？このド変態は女優……………演じることは得意なのよ。
慧人の性癖にあわせて何でも演じられるわ *、ω、(ドヤア」

「あつそ。でも、俺は素のお前が好きだけだな」

「……………っ！」

「……………ん？千聖？」

すると急に歩みを止めて俯く彼女。今度は一体なんだ？

「……………不意打ちはずるいわ……………私も好きよ……………あなたのこと」

小声で何か言つたと思うと、顔をあげて腕に抱きついてくる。

「ふふっ、じゃ、このままホテルに直行ね♪」

「なんでそうなる」

「だって素の私が……………つまり、ド変態な私が好きなんでしょう？」

「うん。そこまで言つてねえよ」

「私も慧人のこと好きよ。特に鬼畜でドSなところ」

「うん。お前は俺を怒らせたいのか？」

「きやつ♪もしかしてオシオキかしら？ペットプレイの次はどんなプレイが待っているのかしら？」

「ねえよ。何も」

「個人的にはろうそく攻めか、三角木馬がいいと思うわ。拘束鞭打ちも可よ」

「やらねえから」

「備えあれば憂いなし。心の準備はいつでもできているわ」

「いらねえ準備をしてんじゃねえ」

そんなことを言い合いながら、俺は彼女を送り届けるのだった。

ちなみに送り届けた後……

「君、ちよつといいかな?」

「何でしょうか?お巡りさん」

「先ほど、この辺で女性に首輪を付けて暴行を加えている男性が居るという旨の情報があつたんだが……」

誰ですかそれは?もう、尾ひれに背びれどころか、全身が変わって
いないか?

「へえ、そんなことをするヤツもいるですね」

「何か知らないかい?」

「いえ、知らないです」

だって、俺は首輪を付けさせてないし。あの馬鹿が勝手に付けただけだし。それに暴行ではなく外そうとしただけだし。……待てよ?もしかしたら、さっきの通報されたヤツと別案件か?

「情報によると、高校生ぐらいの若さだったらしいが……」

「一応、俺は高校生です。でも、高校生でそんなことに目覚めるってヤバくないですか?」

「む。確かにそうか」

「きつと、ちよつと若く見える大学生とかおっさんですよ」

「ちなみに背が170〜180……あれ?君もそれぐらい背があるよね?」

……あれ?俺、疑われてね?

「あはは、確かにそうですね。でも、それぐらいの背の人なんて珍しくないですよ」

「そうだね。ちなみに君はここで何を?見るからに一人のようだが……」

「友達を家まで送り届けていたんですよ。相手女子なんで、この時間に一人はよろしくないとと思って」

「それはいい心掛けだね。まさか、その女子に危害を加えたりとかは？」

「しないですよ。そんなこと」

むしろ、(精神的な) 危害を加えられている側である。

ちなみに、この後、疑いを晴らすのに(地味に)時間がかかったことを記す。誰だよ、その首輪付けて暴行した最低クズ野郎は。そいつのせいで俺が迷惑を被ったんだけど？

疲れたときは癒やしが欲しい

疲れ。一言で言ってもそれは色んな意味を持っているだろう。

例えば、運動などをして肉体的な疲れ。何かしらプレッシャーのかかることを続けて精神的な疲れ。或いは、勉強などで頭を酷使して脳の疲れ。他にも人によって感じる疲れや疲労といったものはそれぞれ違う。

「けーとーきーてるのー?」

「へいへい、聞いてるっての」

「大体あの無能スタッフは……」

ちなみに目の前に居る彼女……千聖は、俺の膝の上に頭を乗せて、ベットの上でゴロゴロしていた。最近仕事も忙しかったのか、まるでせき止められていたダムを破壊したように、愚痴が止まることを知らない。

「もうね、ダメなの。分かる? 全くねえ。どれだけ尻拭いが大変だったと思うのよ。ねえ? 分かる?」

「そうだな。大変だったんだな」

この怠い感じの絡みはかれこれ二時間続いているだろうか。最初の三十分は、激しい剣幕というか何というかで荒れていたけど……ん? つまり俺って二時間半も彼女の愚痴を聞き続けているのか? ……ついでに膝枕も。

更に三十分後……

「何だか疲れたわね」

「そうだな」

三時間ほど愚痴をはき続けた千聖はついに止まった。よくもまあとは言わないが……三時間もなんだかんだでぶっ続けて話し続けたわコイツ。

「トイレ行きたい」

「行ってこい」

「動きたくない」

「知るかよ」

「連れてって」

「一人で行け」

「抱っこ」

「何歳だよ」

「17歳」

「じゃあ、一人で行け」

「抱っこ」

「……………」

「抱っこ」

「……………はあ。とりあえず身体起こせ」

「はい」

というところで何時間ぶりに身体を起こす千聖。ベッドの淵に足をかけて座り、手を払って待っている。

「ほら、行くぞ。放すなよ」

「うん」

ギョツと俺を抱き締める千聖。彼女が落ちないよう身体を支えながら1階のトイレまで連れて行く。

「着いたぞ」

「うん」

「放せ」

「いや」

「……………は？」

「だって、放すなよって言われたもん」

「……………」

マジかよコイツ。

「阿呆か。放せ」

「じゃあ、代わりに傍に居て」

「ドア越しには居てやる」

「いや。一緒にいるの」

「……………」

千聖は普段も壊れているが、こうしてストレスや精神的な疲労が溜

まりに溜まったときは、面倒い。普段の変態として壊れるより、何と
いうか……ワガママなところが增える。仕事上、仮面を付けていた
り、学校とか普段も、白鷺千聖はイメージを損なわないよう立ち回り
を気を付けている。だからこそ、普段から押さえつけている性欲以外
の欲望もこうして、止めていたダムが決壊すれば漏れ出てくる。

「何でお前が用を足すところにいないといけねえんだよ」

「だって、そのまま興奮してくれれば襲ってくれるでしょ？」

「はい。ドアの前にいるからな」

そう言つて強引に扉を閉じる。ワガママ×変態はどうしようも
ねえ。

今の状態のこの女の相手をするのは、はつきり言つて面倒。ただ、
ストレスを解消する場合は誰にでも必要になってくる。もちろん、スト
レスの発散方法は人それぞれだが、コイツの発散方法はこうやって誰
かに対し愚痴をほくこと。あくまでコイツは共感とか意見が欲しい
わけじゃなく、溜まりに溜まつている毒を吐き出したいだけ。それコ
イツが自分を壊さない方法だから。……まあ、その毒をぶつけられる
相手は俺なんだが。

「ん」

扉を開けた千聖。洗面台に行つて手を洗つたかと思うと、手を広げ
て待っている。

「……は？」

「ん」

手を広げ、ジト目で見てくる。……ああ。

「はいはい」

「……ん」

彼女の背中に手を回すと、彼女も首の後ろあたりに手を回す。そし
て……

「……むう」

「なんだよ。どうせ抱っこだろう？」

「……そうだけど違うのよ」

「なんだよ」

「……そのままキスして欲しかった……なんてね」
「……………」

俺の部屋まで連れて行き、ベッドの淵に腰掛ける。

「……………迷惑をかけて……ごめんなさい」

「別に、迷惑なんて思ってたねえよ」

「いつもより品がなかったわ」

「いつも下ネタを提供してくるだろうが」

「私は品のあるネタを提供していたつもりよ？」

「知らねえよ」

「……酷いわ。私の上品なネタも分からないなんて……」

「分かるか阿呆が」

「いい？品がないっていうのは（バーン！）とか（ドーン！）とか（ゴーン！）なの」

「……………」

「そして、品があるのは（ピーー）とか（ピーー）とか（ピーー）なのよ？」

「……………」

おかしいな。今全部にモザイクがかからなかったか？

「……かなり疲れているんだな。お前」

そうだ。彼女はきつと疲れているに違いないんだ。んー疲れているか……

「……一緒に寝るか？」

「え？」

「いや、寝たら少し落ち着くかなって」

「うん。一緒に寝る」

「そうか？あ、お前がさつき言ってた（ピーー）とかそういう系はなしだけだな」

「は？」

「え？」

「ちよつと待って。（ピーー）とか（ピーー）がないって正気なの？」
「いや、正気だけど？お前の頭が正気か？」

「……騙されたわ」

「知るかよ」

「……私のわくわくを返して欲しい」

「わくわくって……はあ。……そこまで言うなら、少しだけするか？」

「ええっ!?!いいの!?!」

「腕枕でいいか？」

「そのどこが少しなのよー」

という鋭いツツコミを無視してベッドの上で横になる。そして、腕を軽く伸ばして……

「来るか？」

「……」

不服そうな顔をして、俺の隣に横になる千聖。そして、腕を枕にしてくる。反対の手で掛け布団を俺たちにかけて準備完了。

「よしよし……」

「……」

千聖が上腕二頭筋あたりに頭を乗せているので、肘を曲げて彼女の頭を優しく撫でる。反対の手は、彼女の肩あたりに置いてある。

(あ、あれ……?ど、どうしましょう……思ったより慧人が近くに居て恥ずかしいわ……!)

この後、二人揃って寝た。

慧人は恐ろしいまでに体力がある。俗に言う無尽蔵な体力を持っているのだ。そして、精神もガラスみたいな脆いものではなく、鋼……いえ、鋼を超えたレベルのメンタルを持っている。メンタルにヒビが入ることも、メンタルがプレッシャーなどですり減らされることもほとんどない。

しかし、そんな彼でも疲れを感じないわけではない。どんなに体力があろうと、どんなに精神が強かろうと、彼もまた一人の人間である以上疲労とは背中合わせ。疲れという感覚は彼にも存在する。ただ、彼が疲れを見せる姿というのは中々にレアだったりするが。

「……………」
ベッドに背中を預けながら床に座る彼。

ただいま、私と彼は勉強会中……あ、保健体育じゃなくて普通に勉強中ね。宿題を一緒に終わらせているわ。まあ、彼は面倒くさがりだし、不真面目だし、口も悪いけど頭はいい方だと思う。何というか、タ イプだけ見れば日菜ちゃんに近い。だけどその才能を見せつけることもなければ、そもそもやる気を出す気がほぼ感じられない。能ある鷹は爪を隠すタイプかしら？いえ、ただクソほどマイペースなだけね。

そんな彼も、ただやる気が起きないだけでなく、今にも寝落ちしそうなのか、時折手に持つペンがミニテーブルの上に落ちる。

「慧人。お疲れ？」

「……………まあ……………」

「何してたの？」

「昨日、放課後に部活やって……………帰ってNFOして……………夜中に自主練習……………」

「そう……………」

いつもならここで『夜の自主練って（ピーー）の？』とか言うところだが、生憎私は空気が読めない慧人専用ド変態DMペットではない。今のご主人さ……慧人の疲れ具合を考えるといつもみたいに冷たい目で、相手を蔑むような感じで、私の身が震え上がるような返しが帰ってこないことぐらい分かるわ。

「休む？」

「これだけ終わらせる」

「そう。じゃあ、すぐに終わらせて休みましょう」

「ああ……」

彼の意志を尊重し、目の前にある課題を終わらせにかかる。疲れているはずなのに、何故かいつもより課題を終えるスピードが早いわね……あ、そつか。あまりに慧人が疲れすぎているから、私が色仕掛けしていないからだわ。流石、ご主人様のことを考えられる優秀なペットね。

……ふふつ。今、色気がないでしょと思った人たち？後でオハナシがあるから校舎裏ね？

ということ、いつもの何倍というスピードで課題を終わらせた私たち。

「ふああああ……」

慧人が大きなあくびを一つ。ベッドに背を預け、このまま寝そうな感じだ。

「慧人、ハグをしないかしら？」

「……ハグ？」

「えつとね、30秒ハグをするとね、ドーパミンとオキシトシンっていう幸福感を感じたときに出るホルモンとストレス軽減に役立つホルモンが出るの。だから、その……」

「分かった……しようか」

「……ええ！行くわよ……！」

慧人が手を広げて、受け入れ体制になっている。私は伸ばされた慧人の足に……太股に座り、慧人を抱きしめる。慧人も広げていた腕を私の背中に回し、優しく……しかし、私を放さないように抱きしめる。

静かな時間が流れる。気まずさから来る静かさではなく、今の時間を噛み締めるような……ああ、本当に好きなんだな。心の底から……彼のことが……

「そろそろか？」

ゆっくりと手を放す慧人。気付けば時間がかかり経っていたように思える。

「ありがとな」

私の頭を撫でる慧人。そんな彼の手を両手で掴んで私は……

「……胸も触って」

そっと自身の左胸に持つて行く。いつもなら、この時点で彼に抵抗されたり、なんか言われたりするが……

「分かった」

静かに服の上から揉み始める彼。そしてそのまま……

……やってしまった。頭を抱えている俺に対し、千聖はからかうように言葉を紡ぐ。

「ふふっ、凄くいい気分ね。……最後まで流せなかったのは残念だけど」

「いくら疲れが溜まっていたとはいえ……まさか、雰囲気流されるところは思わなかった」

「ほんと、あと少しで行けそうだったのに残念だったわ」

「あぶねえ……マジであぶねえ……初めてお前を怖く感じたわ」「怖いなんて酷いわ。私はそつと流れに身を寄せただけなのに」

普段が、ガツガツ下ネタをぶつ込んでくると言うか……そういう空気に持って行こうという感じが強すぎていた。そのため、今回みたいな、ゆっくりと少しずつ進められるのは予想外すぎた。警戒心を解きすぎた……いや、解かされすぎた。

（ふふつ、なるほどね。慧人はガツガツよりこうやって、雰囲気を作つて、焦らずゆっくりと進めればコロって落とせそうね。まあ、いつもみたいに頭が回っていたら、初手で詰んでいたでしょうけど。……いえ、それもあるけど恐らく普段とのギャップね。なるほど……ギャツプ萌えかしら？）

「でも、残念だったわ。あなたの（ピーー）を触ろうとするのはもつと後の方がよかったわね。キスとか、服の下から揉ませるとか……そつちだったわね」

「マジで後者だったら流されてたな……そのおかげでお前の欲が見えたし」

「そう思うと惜しいわね。ねえ、やり直さない？ テイク2よ」

「嫌だよ。もう完全に目覚めたからな」

「え？ けだもの 獣としての本能が？」

「頭がだよ阿呆」

「あ、そうだ慧人。これからも定期的に揉んでくれないかしら？ バストアップしたいのよ」

「ぜってえ、協力しねえからな」

「そう、残念ね」

珍しく早めに切り上げる千聖。いつもならもう少し長引かせそうだが……

「ふふつ、今日は聞き分けのいい千聖さんよ」

「……………そうかよ」

「私、分かったわ。あなたは聞き分けのいいペットが好きなんだって」
「お前をペットにした覚えはない」

「そんな！こんな愛おしく、ご主人様が大好きで、従順なペットの何処が不満かしら!？」

「俺に人をペットとして扱う趣味はねえ」

「え？ないの？」

「ないわ」

流石にそんな趣味はない。

「仕方ないわ。じゃあ、私がこれからあなたを調教して、ペットの正しい躰け方とペットの扱い方を伝授してあげるわ」

「嫌だよ」

「……あれ？ペットに調教されるご主人様……？でも調教されるのはペットだし……？ん？慧人が私を調教する、私が慧人を調教する。……なるほど、パラドックスね」

「鶏が先か卵が先かみたいに言うんじゃねえよ。というか、俺はお前を調教しないし、お前に調教されなければ解決だわ」

「……本当に目が覚めたようね。……はっ、まさか私の胸を揉んで回復を……？私の胸にはそんな効果が……？」

「ねえよ。目が覚めたただけだ」

本当に油断ができないな……ただ、コイツに上を取られたくないな。なんとなくそう思いました。

「今、気付いたわ。実はゲームの女僧侶って、こういうこととして男性を回復させているのかしらね」

「やめろ？お前、今全世界のRPG好きを敵に回したからな？」

「ふっ、喧嘩なら買うわ——慧人が」

「勝手に買うなよ。買うならお前が買え」

「じゃあ、喧嘩を冬木慧人一人で買うわ」

「だから、なんで諭吉さんを差し出す感じで、俺を差し出すわけ？」

「しょうがない。少し譲歩して、冬木慧人二人で買うことにするわ」

「俺は一人しか居ねえっての。勝手に二人目を差し出すな」

後、こいつの発言も注意しないとイケないと、改めて思いました。

そんな感じでもいつも通り今日も過ぎていくのであった。

嘘から始まる新たな関係

最初は彼のことが理解できなかつた。好きか嫌いかで言えば嫌いだったと言える。

最初の出会いの後も何度か会って一言二言、話をするところがあった。仮面を付けて対応していたが、彼は何処か楽しくも面白くもなさそうだった。

いつからだっただろうか。彼に興味を持ち始めたのは。

彼は、私が有名人と知つてもなお、接し方を変えなかつた。至つて普通に、出会つたときとそんなに変わらない。まるで、そんな肩書きなんて興味がないように。

いつからだっただろうか。彼のことを目で追いかけるようになったのは。

彼を街で見かける度、通学路ですれ違う度に気付けば視線は彼を追っていた。見ようとして見ているのではない。気付けば、彼を見ていることが増えていた。

いつからだっただろうか。彼に対して仮面を付けなくなったのは。

彼と話すときは、ただの一人の女子高校生、白鷺千聖に戻っていた。元天才子役なんて大層な肩書きを捨て置いて、一人の少女として話すことが出来た。

いつからだっただろうか。彼のことを好きになったのは。

不良に助けてもらつたみたいなの、そういう特別なことはなかつた。何度も会つて、何度も話して、そういう何でもないことを通して、彼に対して段々と惹かれていった。

いつからだっただろうか。彼とただの友達で居るだけでは満足できなくなつたのは。

ただの友達では居たくない。でも、今の関係が壊れてしまうのが少し怖い。せつかくの関係が崩れ去ってしまうのは耐えきれない。一歩踏み出したい……でも、その一歩は踏み出したら戻れない気がして………怖い。でも、何もしないで居れば、何処か遠くに行つてしまひそうで……

だから私は――

「ねえ、慧人」

「なんだよ。改まって話とか」

夜の公園。俺は千聖に呼び出されてやって来た。

いつもは俺の家とかC i R C L Eとか喫茶店なのに、指定された場所は公園。しかも、時間帯が夜。『大事な話があるから来て欲しい』って感じで、いつになく真面目な感じで頼まれた。流石に、そこまでされたら断ることも出来ないしなあ……

「あなたって、彼女は欲しくないかしら？」

「はあ？」

いきなりよく分からない質問を投げかけてくる。彼女だと？

「いや、別にそうでも……」

「そうよね。欲しいわよね」

「聞けよ」

特に欲しいと思ったことないけど？

「年頃だもの。欲しいに決まっているわ」

「だから、そうでも……」

「隠さなくていいわ。全て分かっているもの」

勝手に話を進められているのだが？どうすればいいんだ？

「えつとね、その……高校生の青春とか恋愛を題材にしたドラマのヒロイン役に抜擢されたの」

「おお、すげえじゃん。おめでと」

「ありがと。それでね、役作りのためには……その、私が恋愛を知る必要があると思うの」

「なるほど……役作りって大変だな」

「それでね、私って実は処女なの」

「飛んだなおい」

「あ、間違えた」

「間違えた？それって経験済みってことか？」

「いえ、処女って言うのは間違っていないわ。そうじゃなくて、私って実はまだ彼氏いたことがないって言いたかったの。こんな絶世の美少女だけど、実は未だ彼氏ができたことないの」

「あつそ」

正直、コイツの過去の恋愛云々とか興味ないけど？

「あら？結構、重大発表したつもりだったのだけど？ほら、私が彼氏いたことがないって相当な衝撃じゃないかしら？」

「いいや？お前のその腹黒い性格と、芸能界でのし上がることしか考えていなかったことを踏まえれば、予想外ってわけではないと思うけど？恋愛にかける時間はないわとか、その恋愛が私のキャリアにプラスになるのかしらって」

「あなたって……私の良き理解者よね」

「そうでもねえだろ。お前のことを知っていれば想像に難くない」

「いいえ、それだけじゃないわ。あなたは私のスリーサイズから食べ物物の好みに、週に何回（ピーー）をしてそのオカズにあなたを使っていると言うことまで……」

「特に後半は知らねえし知りたくもないけど？……ん？ちよつとまで。今、すげえこと言われたの気のせいかな？」

「そんな！あなたは私の隅々まで知りたいと想っているんじゃないの」

!？」

「思ってねえけど？」

「ちなみに私はあなたの全てを知りたいと想っているわ」

「あっそ」

「ええ。あなたを24時間監視して、何時何分何秒に何処で誰と何をしているのかを知りたいわ」

「……………」

恍惚そうな笑みを浮かべる千聖。あれ？俺って実はヤバイヤツに目を付けられた？ド変態、腹黒にヤンデレって……

「ふふっ、冗談よ。精々、あなたの過去、現在、そして未来……全てを知りたいと想っているわ」

「……………」

それも充分やばくね？というか、目が笑っていないし、過去も入った分さつきよりヤバさ増した？

「…………それも冗談よ。あなたが傍に居てくれれば他に何もいらないわ」

「……………」

なんだろう。何がガチなんだろうか。もう何がガチでもいいけど、俺はもしかしたらコイツとの接し方を見つめ直さないといけない気がしてきた。

「…………そんな…………それって…………正真正銘、私のご主人様になってくれるってこと!？」

「……………」

ちげえよ。ああ。やっぱりどうしようか。コイツ……

「……………ここで捨てるか」

「あうっ……………！そ、そんなゴミを見るような冷たい目……………はあ……………はあ……………もつと見てえ……………！」

「……………」

やっぱりダメか。ゴミのポイ捨てはよくないよな。うん。

……………というかさ。捨てるって言われて、興奮するとかもう末期だろ。

「……話が逸れたわね」

「逸らし過ぎだ」

「えつとね……単刀直入に言うわ」

「どうぞ」

「私と付き合つて」

「……………」

「一体、どういう話の流れからこうなったんだろうか？」

「あ、も、もちろん役作りって意味よ？ほら、さっき言つてたでしょ？」

「あーお前が逸らすからすつかり抜けていたわ」

「そ、そのね？えつと、その役作りの為に……き、三ヶ月！三ヶ月という期間を設けて、あなたには私の恋人になって欲しいのー！」

「つまり、仮の彼氏彼女の関係を三ヶ月間結ぶってことか？」

「そ、そうね。流石慧人、物分かりがいいわね」

「それ、俺じゃなくてもよくねえか？」

「それはダメよ！」

「は？」

「慧人じゃなきやダメ……他の人じゃ嫌なの」

「……そうかよ」

「……ダメ？」

「別に。そういうことなら協力は惜しまないぞ」

「ありがと……あ、えつとね。仮のつて付いているけど、もちろん恋人らしいことは何でもしていいからねー！」

「はいはい」

「(ピーー)とか(ピーー)とか(ピーー)もしていいからねー！」

「それは検討するわ。多分、却下するけど」

「まあ、要するに千聖が悪友から彼女(仮)という立ち位置になつたわけか。」

「じゃあ、三ヶ月間よろしくな」

「え、ええ……そうね」

それにしても奇妙な話だな。まさか、千聖とよく分からない関係に

なるとは思わなかった。いや、割と前からか。

「帰るか。送っていくぞ」

「ありがと……あ、恋人同士だからやっぱり恋人繋ぎかしら？それとも、腕を組んだ方がいいかしら？」

「どちらでも」

「きつと慧人のことだから、腕を組んだ方が喜ぶわね。そうね、だって事故で胸が当たったりするかもしれないもの。でも、慧人。恋人同士だからいいのよ。胸を触ったりしても……あ、流石に付き合ってからで、肉体関係まで進んじやうのは進みすぎかしら？いえ、でも既に胸は揉まれたことがあるからセーフねきつと」

「うん。手を繋ぐか」

「あらそうなの？別に私としては胸を当てる……失敬、腕を組むのはやぶさかではないのよ？」

「当てるほどの胸がねえだろ、というツツコミは心に秘めておこう。」

「いいかしら？恋人同士になったとしても、節度をしっかり守るのよ？」

「……マジか……お前から節度って言葉が出るとは思わなかった」

「ええ。だから、今からホテルに行つて朝まで……」

「帰るぞ。明日も学校あるからな」

「あなたなら平然とサボりそうよね」

「……そんなわけないだろ？」

「だいぶ間があったわよ」

と、そんな感じで俺たちは二人、横に並んで帰ることにする。

期間限定の彼女と彼氏という関係になったが……あんまり、実感がわかねえな。まあ、いつか。

その日、自宅に帰った白鷺千聖は、ベッドの中で一人悶えていた。「私のバカ……！何で嘘をつかないと、告白の一つも出来ないの……！いえ、あんなのを告白と呼べないわ」

千聖は嘘を付いている。ヒロイン役に抜擢されたといっていたが嘘である。そんな話は一切、存在していない。では、何故彼女は嘘をついたのか。

彼女は恐れていた。本気で告白をして振られることを。慧人との関係が終わってしまうことを。

「それに……返事が怖いからって……三ヶ月とか……役作りというのも強調しちゃったし……」

当初の予定では、期間を設けるつもりはなかった。役作りというのも最初の導入だけで、念押しするつもりはなかった。

「はああああああああ……私って面倒くさい女ね。……好きなのに、好きという言葉をうまく伝えられないなんて……」

（もし、これが演技なら……役者としての私なら言えた。相手が慧人以外なら、仮面を付けてスラスラと言えた。……でも……演技じゃないから……本当に好きだから……）

「……好き……大好き……」

（……あなたは演技って想うかもしれない。雰囲気を作るための言葉って想うかもしれない。……でも、何度でも、何回でも伝えるから……）

こうして、彼と彼女の関係は新たなステージに立ったのだ……

現在11月中旬。残り期間、三ヶ月。

急に余所余所しくなると大体何かが起きている

「慧人ゝ入るわよ」

ガチャ

とある休日。付き合い始めて（ただし、正式ではなく仮だが）一週間ぐらいした今日この頃。私はノックをせずには彼の部屋に押し入る。私と彼の間にはそういう礼儀とかは不要………というのは半分冗談ね。いきなり押し掛ければ、彼がやましいことをしている現場を目撃できるかもというのが本当の狙いね。

まあ、彼は気配察知能力が異常に高すぎるため、半径100m以内の人間の位置を察知できるとかなんとか。そのせいで、私が襲来することくらい知っているから、絶対にそういう現場をおさえられないのだけ。……そう思うと凄く便利な能力ね。誰かを見つけたと思った時に、血眼になって探す必要がないもの。ただ、情報量が多すぎてパンクしないか心配になるけど。……私も欲しいわね。慧人限定でいいから、半径数km以内にいたら場所と行動まで分かる能力が。

「……………」

「あらっ？」

慧人はベッドの上で横になっていた。呼吸のペースはゆつくりだけどほぼ変わらない。喉元を見るけど、唾液を飲み込む動作がほぼない。軽く頬を叩いてみて、目元も確認するけど反応は一切ない。

確実に寝ているわね。まあ、部屋に入った瞬間から、狸寝入りの可能性は低いと思ったけど念の為ね。確か慧人って、一度寝るとしばらく起きないって言っていなかったかしら？

「慧人ーあなたのことが大好きな千聖さんが来たわよー」

「……………」

「……………」

慧人のおなかの上に乗って声をかけるけど無反応。当然と言えば当然だけど、言っていてむなしくなるわね。

「…………慧人って寝ていると案外可愛いわね」

目つきが怖いところとか気にしているみたいだけど、別にそうでもないわね。気にしすぎだと思っただけど……まあ、いいわ。私はそんな、少しセンチティブなところも可愛くて好きだと思っっているから。
「……好きよ、慧人……大好き」

「……今、何時だ……」

「14時30分です」

「……ああ」

最近の目覚まし時計は聞くと答えてくれるんだな……いや、そんなわけねえか。うちにそんな高性能な目覚まし時計くんは置いてない。

「はよ……千聖」

「おはよう慧人。いえ、こんにちはかしら？」

「ああ……ん？」

と、何か違和感を感じる。具体的には、千聖との距離が遠い気がするのだ。

「お前……何か遠くね？」

「いえ、そんなことないわ」

「いや、お前のことだから寝込みを襲うぐらいしそうだけど……」

「そんなことしないわ。私を誰だと思っているの?」

「ド変態・ドM・ペット志願者」

「否定しないわ。後、恋人(仮)を忘れてるわよ(´・`・´)」

……貼り付けたような笑顔。いつものアイツなら『え?襲って良かったの?言ってくれば襲ったのに……あ!じゃあ、今から襲うわね!だから寝たふりをしてちょうだい!』ぐらい言いそうなのに……まさか……!」

「千聖、ちよつと来い」

「いえ、私には部屋の隅っこがお似合いよ」

「いいから来い。雌ブタ」

「そこまで言われたら仕方ないわね」

そう言つてゆつくりと歩いてくる彼女。ところで、雌ブタつて言うのと従うとかヤバくねえか?

そして、近づいてきたところで、彼女の髪を軽くあげて……

「なっ!?!いきなり何をしているの!?!」

「……アニメや漫画だところやつて計るけど普通にわかんねえや」

彼女の額に自身の額を合わせるが……うん。わかんねえや。ただ心なしか彼女の顔が紅い気がするし……やっぱり風邪でもひいているのか?いや、待てよ?もしかしたら、風邪よりヤバいものにかかっているかもしれない。

「……ついに頭がイカれたのか……?」

まさか、新種の病気にかかって、頭がイカれてしまったのか?いや待てよ?新種の病気にかかってド変態から普通に戻ったのか?……どんな病気だ?あの千聖のド変態を治してしまふ病気なんて……あれ?それ病気じゃなくね?どっちかというのと治療とかそつちじゃね?

「……………(´・`・´)ニコ」

すると、静かにだが怒りというか黒いものを感じる。なんだろう?千聖が凄い笑顔でこちらを見てきている。

「どうした?何か怒っているのか?」

「いいえ、何でもないわ」

「……やっぱり今日のお前、変じやないか？」

「そうかしら？ 仮とは言え、付き合うことになったし、お淑やかにしているだけよ？」

「いいや、やっぱり変だな。それにしても余所余所し過ぎる。何より俺は今日、お前の変態発言を聞いていない」

「……あなたの変だと思っ根拠が悲しすぎるわ」

頭を抱えている千聖。……やっぱりだ。普段なら『え？ そんなに言うて欲しいの？ もう、それだったら、言うだけじゃなくて実践しましょうよ！ ねえそうしましょうよ！』ぐらい言いそうなのに。

「千聖。お前、イヌを飼っているだろう？」

「レオンね。確かに飼っているわ」

「例えば、レオンが息をしていなかったらどうする？」

「待つてちようだい？ ご飯を食べないとか、そういうレベルじゃなくて？」

「ああ。今のお前はそれぐらいおかしいんだ」

そこそこの付き合いになってきた俺には分かる。普段の千聖と、目の前の千聖はそれぐらい差があるんだ。……まあ、こっちの方が変態発言がなくて助かっているのだが……それにしても変だな。一体何が……

「……もしかして、お前……」

俺はある一つの仮説に辿り着く。そうか、それなら変態発言をしないのも、原因を言いにくいのも、こうして距離を取っているのも納得だ。

「……性病か」

「は？」

「いや、これ以上は言わなくていいんだ。確かに、それは言いにくいだろう。それに、変態発言をしないのも、万が一……いや、億が一、俺をその気にさせないため。距離を取っているのも分かる」

「は？」

「そうか……そうだったんだな……すまない。気付いてやれなくて」

「……慧人」

「へーい……で？お前の反応から、さっきの推測が大ハズレなのは認めるけど、今日の違和感の原因はなんだよ」

「あら？私はいつも通りの千聖さんよ？」

「目を見て言え。今、僅かに視線が上を向いたぞ？」

「……なんで、こういう時ばかり鋭いのよ……」

すると、少し距離を取って縮こまる千聖。やっぱり何かが変わだな。

「……なんだよ。何かあったのか？」

「……言っても怒らない？」

「いや、内容によるけど……」

「じゃあ、言わない……」

「……言わないと解決しないんだけど？」

「嫌よ！せめて、全裸にされて、手錠で両手を拘束されて、猿轡をさせられて、鞭打ちがない限り言わないわ！」

「それ、お前の欲望だよな？」

「……そんなことないわ。そこに三角木馬もあればなおいいなんて思っていないわ」

「というか、猿轡をしていたら喋れないだろ？」

「……」

何だろう。抑えていたものが少しずつ漏れ出ている気がする。そのまま行けば平常運転に戻れそうな気がする。ということは、ド変態が治療を受けて普通になったわけではないな。

「千聖……分かったよ。そこまでの覚悟なら怒らないからさ」

「……いえ、あなたが拷問、調教をしない限り言わないわ」

「おい。今のは怒らないなら言う流れだっただろ」

「知らないわ。流れはぶった切るものよ」

どうしようか。かといって拷問する気もねえし、というか、手錠も猿轡も鞭も三角木馬もウチにはねえよ。後、何故か調教も増えたし。

「分かった……そこまでの覚悟なら……」

「え？もしかして、拷問されて調教してくれるの？（○、▽、○）
ワクワク」

どうしてこの人は、服に手をかけて脱ぐ準備が万端なんだろうか？

まあいい。

「……今からお前のことを白鷺さんって呼ぶことにするわ」

「ごめんなさい。言うからそれだけはやめてください」

謝ってくる千聖。呼び方って大事なんだな。うん。

「で？何があつた？」

「何があつたというか……何かしたというか……えっと……その……ね」

凄いい言いにくそうにしている彼女。変態発言が平然と飛び出る彼女のことだ。そんな彼女が言いにくいことなんて、本当に何があつたんだろうか？

「……………寝ている慧人に……したのよ」

「ん？何したって？」

「だから！寝ている慧人に……キス……したのよ」

顔を真っ赤にして、話す彼女。あまりの内容に俺は……

「……はあ……」

ため息をついていた。

「ちよ、ちよっと！私としては流石にやり過ぎたかなーって思っているんだから……」

「……………」

やっぱりコイツの感覚おかしいわ。いつもの変態発言の度合いを考えると、寝込みを襲っていても不思議じゃないのに……まさか、キスをしただけで、ここまで変わるのか。

「……………怒っていないの……？」

「何で怒ると思われているんだよ……」

「だ、だって！私たちの初めてのキスが……その……奪う形で……寝ている間だったし……」

何というか……まあ、普段の言動、行動をしている人間ととてもじゃないが同一人物とは思えないな。うん。

そう思いながら、俺は立ち上がって千聖のもとに行く。

「け、慧人……う？や、やっぱり怒っているわよね……？」

片膝をつけてしゃがみ込み、彼女の顎を軽く持ち上げる。不安げな

瞳が目に映るが、俺は自身の目を閉じ……

「……………」

そっと口づけをした。

「そんなことで怒るわけねえだろ。バカかお前は」

「……………っ!!!」

「つと、いきなり飛び込んでくるなよ。バランス崩すかもだろ?」

「……………好き……………大好き……………!」

この後、1時間くらい千聖は俺のことを放さなかったことを記す。
ちなみにその後はいつもの千聖に戻ったことも記す。

番外編 ハロウィン

10月31日。ハロウィン当日である。元々は古代ケルト人が起源と考えられているお祭りで、今は民間行事として広まりつつあり、祝祭本来としての意味はない。

「ハロウィンは収穫祭じゃあ!」

「二」そうだそうであ!」二」

「決して仮装した男女がイチャつく日じゃねえ!」

「二」そうだそうであ!」二」

現在、10月31日午前。今日は学校があるため、登校しているが……うんまあ、こんな感じだ。俺が通っている虎南高校は、普通科の高校ではあるが、そこまで偏差値も高くなく、有り体に言えば、バカが集まってドンチャン騒ぎをしている高校だ。

ちなみに、今の時間は……

「喰らえ! 必殺の……」

「返すわ」

「ぐはあっ!?!」

「ヤツに一人で挑むな! 大人数で囲んで、確実に叩きのめすんだ!」

「二」おう!」二」

体育、サッカーの時間である。本来、サッカーとは11人1チームで、相手のゴールを奪い合うようなスポーツだが……うんまあ。何故か1対21で、しかも、ボールをオレにぶつけるスポーツに変わったな。

「貴様は最重要警戒人物! ここで大人しくくたばれ!」

「そうだこのハーレム野郎! 死に晒せ!」

「何でお前ばっかり……!」

「LIFE or DEATH?」

怨嗟と悲鳴と羨望と願望と……なんかもう、色んな(ヤバそうな)ものが込められたボールを的確に蹴り返していく。やれやれ、こいつらがバレンタインやクリスマス前の前にうるさくなるのは知っていたが、ハロウィンでもうるさくなるのかよ。

こんな殺伐として居る中、先生はというと……

「いいねえ〜青春だねえ〜」

「……そうですね」

「眺める雲をのんびり見ているのもいいよねえ〜」

こういうことに騒がない系の（希少な）クラスメイト（友達）と一緒に、ベンチに腰掛け空を見上げていた。まあな？気付けばサッカーボールを使った死闘をしているからな？現実逃避もしたくなるよな？だから、先生を責めることは出来ないが……少しくらいは助けてくれても罰は当たらないと思いますよ？

「オレらも混ぜろお！」

「そうだそうだ！選手交代だあ！」

「お前ら……ああ！あの魔王を討ち取るぞ！」

「おっしやああああ！」

ああ、空は青いなあ……

「というか、収穫祭なんだろう？もつと平和に行こうぜ？」

「はあ？何を言ってるやがる」

「はあ？いやだって最初に収穫祭って……」

「収穫祭……そう！リア充の命を収穫する祭りだろ？」

「……なるほど。そういう解釈をしたか……ふむ。一理ある」

（いや、ねえよバカ）

「さあ、カーニバルの始まりだあ！」

「Yeah! Let's party!! Fooooooooooooo」

oooooooo

「カーニバルかパーティーか統一しろよ」

今日も、俺たちの高校は平和です。

そんな平和な学校生活も終わり、家に帰ると……

「お帰りなさい♪慧人」

「……………」

そつと、スマホを取り出して電話をかける。

「もしもし警察ですか？不法侵入です」

「ちよ、ま、待ってちようだい!?不法侵入なんてしていないわ!堂々と玄関の鍵を開けて入ったのよ!」

「どうやら、鍵を奪って玄関から押し入ったとのこと。窃盗罪も重ねていそうです」

「重ねていないから!重ねていないから、お願いだから話を聞いて……………」

「……………すみません。オレの勘違いです」

そう言つて電話を切る。

「え?ちよつと?本当に電話をかけていたの?」

「そんなことより、犯罪者予備軍さん。何か言い分は?」

「そうね、鍵は奪つたわけじゃなくお義母さんに…………つて彼女に対する扱いが酷すぎない!?本当に通報されるとは思わなかったわ!」

「いや、ド変態のお前なら喜ぶだろ」

「ふざけないでちようだい!私が喜ぶのはあくまでペット扱いされた時で、犯罪者扱いされた時じゃないわ!」

それで喜ぶのも大概だけだな……………これでも、彼女なんだけどな……

「というか、お前。今日仕事だっただろ?まさか…………」

「あなたと違ってサボっていないわ。十五時までだったから、早めに

家に帰ってきたの」

「帰る家を間違えているだろ」

「間違えていないわ。しっかりとお義母さんに連絡したもの」

「俺には？」

「え？ いらないうでしよう？」

「……………」

まあ、確かにいららないな。うん。

「そ・れ・よ・り！」

「何だ？」

「どうして私の衣装に関する感想がないの？」

「いろいろあつてそこまでたどり着かなかった」

「じゃあ、今、たどり着いたでしよう？」

「ふむ……………」

衣装と言ったが、要するに仮装である。大きめの帽子を被って……
ああ。

「去年の衣装か」

「そうね。よく覚えていたわね」

「まあな。にしても、魔女か……………いいんじゃないか？ 可愛いぞ」

「……………ありがとう」

少し照れている彼女を尻目に、オレはリビングへと歩いて行く。そして、服の裾を引っ張りながらついてくる彼女……………なんだろう。衣装一つでここまで可愛くなるんだな……………普段から（静かにしていれば）可愛いけど。

とりあえず、鞆を一旦床に置いて、ソファに腰掛ける。すると、千聖も隣に座ってきた。

「あれ？ でも去年の衣装がそのまま着れたってことは……………」

「ふふつ、体型維持をしつかりやってきた証拠よ」

「そうだな。……………胸の大きさも維持していたんだな」

「じ、実は胸回りだけは少しきつく感じて……………」

「心配するな。それは気のせいだ」

「……………」

無言でつねられました。どうやらこれ以上は言わない方がいいらしいです。はい。

「ねえ、慧人」

「何だよ」

「お菓子をくれなきや悪戯しちゃうぞ、つてこういうときは言うじやない？」

「そうだな」

「でも、思ったの。私から慧人に対しては、そんなこと言っても無駄だつて」

「まあ、そうだな」

ちなみにだが、ハロウィン用のお菓子は既に作つてある。しっかり千聖の分もあるから、それを持って来れば解決だ。

「ちなみに今回のお菓子は？」

「パンプキンケーキ。昨日作つた」

「……相変わらずあなたは女子力高いわね……でも甘いわ。それくらい想定内よ。残念だつたわね」

「いや、何が想定済みで何が残念なのかは知らんが、今から食べるなら出すけど？」

「慧人……お菓子をあげるから悪戯して！」

「……はあ？」

何を言っているんだコイツは。

「私は思ったの。お菓子をくれなきや悪戯するぞ！つて言つた側は得だと思ふの。でもね、言われた側つて、お菓子をあげるか、悪戯されるかで損しかないのでよ」

「いや、大体子どもが大人に言う想定だし……損得じゃないと思うが……まあいいや。で？」

「そこをお菓子をあげるから悪戯して！に変えることでWin-Winの関係になれるのよー」

「……すまん。日本語は分かるんだが……」

「それなら問題ないじゃない」

……いや、お前の話している日本語はきつと、俺の話している日本

語と決定的な何かが違うに決まっている。だって、どうしてその言葉に変えたらWin—Winになるのか理解できていないんだから。

「はあ……この程度も理解できないなんて……一体、何年私の恋人をやっているのかしら?」

「まだ年単位まで行つてねえよ」

「いい? 私は慧人にお菓子をあげる。つまり、慧人はお菓子を貰えて得をする。慧人は私に悪戯をする。つまり、私は慧人に悪戯をされて得をする……どうかしら? この完璧なロジックは。完璧すぎて声も出ないでしよう?」

「……………」

それで喜ぶのは変態だけ……と言おうとしたが、彼女が末期の変態だということを書いて涙が出そうになった。

「さあ、この飴をあげるから……飴を……飴……?」

衣装のポケットを探すが、飴がない様子だ。

「ちよつと待つてちようだい」

そう言うと、彼女は置いてあつた自身のバックに手を伸ばす。なんだろう。とりあえず、自分の鞆を自分の部屋に置いてきて、制服だし着替えるとするか。

そして、着替え終わつてリビングに戻ると……

「おかしいわね。どうやら、持つてくるのを忘れたみたいだわ」

思案顔で答える彼女。その姿が様になっているのは流石と言うべきか。ほんと、考えている内容さえ違えば素直に感心できるのに……

「どうしましょう。私の完璧な計画が台無しじゃない」

「そもそも完璧じゃねえだろうに」

「そうだわ慧人! 私に、お菓子をくれなきや悪戯するぞ! って言つてちようだい」

「嫌だよめんどくせえ」

「そんな……! はっ、じゃあ、私が慧人からお菓子を貰つて、そのお菓子を慧人に渡せば……」

「ただ、お菓子が帰つてきただけだな」

「それじゃあ、悪戯してもらえないじゃない……!」

「ちなみにどんな悪戯を想定しているんだ？」

「え？当然（ピーー）とか、（ピーー）とか、（ピーー）とか……」

「……………」

いつも通りというべきか、選択肢全てに訂正音が入る。おいおい……

「困ったわ…………」

そういう彼女を無視して、スマホを弄る。こういうときの彼女は放置するに限る。

「……………」

だからこそ俺は、彼女が何かを閃いた、悪魔のような微笑みを見逃してしまった。

「あ、そういえば話は変わるのだけど。この前、宿題でちよつと読めないものがあつたのよ」

「へえ〜どんなんだ」

「これよ」

そう言つて、スマホの画面を向けてくる。えーつと…………？

『Trick or Treat』だ。いや、普通に読めるだろ

…………あ」

「ふふつ、今、あなた『トリックオアトリート』つて言つたわね？」

「……………」

は、はめられた…………だと…………！

「残念なことにお菓子は無いわ。ふふつ、これは悪戯されるしかないわね〜あー残念だわー」

あからさまな棒読みで言ってくる彼女…………クソ、こんなトラップに引つかかるとは…………！一体、どこまで狡猾なんだ…………！…………はっ、まさか今の今まで『Trick or Treat』と言わなかったのはこのためか…………最初からコレが狙いで話を…………？彼女が考えた作戦が失敗したと思わせて、油断させたところを一気に突いてくる…………最初のは決まればラッキー程度でこつちが本命…………クソ！なんて女だ…………！

（この男は警戒していないとチョロいわね。まあ、作戦が失敗した時

はどうしようかと思っただけど、引っ掛かってくれてよかったわ♪」
「……はあ。すればいいんだろ？」

「ええ！お菓子を持ってこなかった私への罰ね！」

「何で罰という言葉をごんなにノリノリで使えるのだろうか？」

「分かった……ただ、覚悟しろよ？ちよつと本気を出すからな」

約4時間後……

「おいしいわね。流石慧人」

「どういたしまして。飲み物は紅茶でいいよな？」

「ええ」

夕食後、切り分けたケーキを食べる千聖。その姿は何処か上品さに満ちており、いつものアレななりは息を潜めている。そんな彼女を見つつ、紅茶を淹れる。

「どうぞ」

「ありがとう」

自分の分も淹れて、一息つく。

「何から何までやってもらって……何か悪い気がするわね」

「別に、今日ぐらいはいいだろ」

「ふふつ。それとも悪戯が少しやり過ぎたとても思ったのかしら?」

「あの程度でやり過ぎとは微塵も思ってねえけど?」

「……………え?」

「というか、やる前に言ったら?ちよつと本気を出すって」

「……………それ、100%本気を出したらどうなるのかしらね」

「さあな」

「……………ただ、今日の激しさは少し癖になりそうね……………」

「お前……………本当にマゾヒストとして目覚めているよな……………」

「でも、大好きな慧人があんなに激しく求めるから、これは仕方のないことよ」

「はいはい。で?今日も泊まっていくのか?」

「もちろん。それで、この後はどういう予定?」

「もう少し時間経ったら練習しに行ってくる」

「(ピーー)の?」

「サッカーのだ。何でノータイムでそれが出てくるんだよ」

「私だからね」

「納得した」

相変わらず凄まじい説得力だな。いつ何時なんどきどういう流れでアレな発言が飛び出しても千聖なら納得だ。

「なら私は台本でも読み込んでおこうかしら。外に出たい気分じゃないし……………というか、よく体力持つわね」

「現役の運動部舐めんな」

「え?夜の運動部?」

「それだと卑猥な意味にしか聞こえねえよ」

「ええ、卑猥な意味で使ったもの」

「……………肯定されると何か複雑だな」

「だって、嘘をつく意味はないでしょう?」

「まあいいや、それまでは宿題でも片付けるか」

「そうね。宿題を片付けようとする慧人の邪魔をするわ」

「いや何でだよ」

「私、さっきまで慧人に遊ばれていた」

「いやお前が言い出したことだけだな」

「今度は私が慧人で遊ぶ番」

「安心しろ。その順番は来ねえよ」

「ふふっ、待ってて来ないなら強引に行くまでよ」

「はっ、やれるものならやってみるよ」

この後、妨害を受けながら宿題を片付けるのであった。

相談する相手を間違えたかもしれない

「紗夜と」

「慧人の」

「キーワード教室」

ドンドンパフパフ

「さあ、今週も始まりました。今回のキーワード教室、司会の氷川紗夜です」

「ゲストの冬木慧人……って、何なんですかコレ？」

「このコーナーでは、毎回違う司会者が進行していくコーナーとなります。ちなみにゲストは固定です」

「待つてください？普通は司会者が固定で、ゲストが変わっていくんですよ？」

「だって、慧人さんは司会だと面倒くさいと言いかねないので、たまたま毎回ゲストが慧人さんになるなら大丈夫かと」

「何一つ大丈夫ではない件について」

「さて、早速ですが今回のキーワードはズバリ『consultation』です。慧人さん、意味は分かりますか？」

「『相談』ですかね？」

「正解です」

「なんで急に英語ですか？」

「企画者が少しでも皆様の勉強になればと言うことです」

「本音は？」

「企画者の突発的な思いつきです」

「納得です」

「ちなみにですが、『Please feel free to contact us.』で、『気軽に相談してください』とビジネスにも使えるそうです」

「へえー」

「というわけで、今回のキーワード教室は終了です。また次回、お会いしましょう」

「え？これ次回もやるの？マジで？」

とある公園にて。とある少女と二人で並んでベンチに腰掛けていた。

「紗夜さん。お話があります」

その相手は氷川紗夜さん。Roseliaのギタリストにして、風紀委員であり、ポテト狂である。え？クールビューティーはつて？まあ、信仰対象ではあるが……そこは置いておこう。

「その前に「ついいいですか？」

「どうぞ」

すると、一枚の紙を差し出し出してくる。

「こちらからコースをお選び下さい」

「……………」

そこには、こう書かれていた。

く冬木慧人専用、請求ポテト表く

・雑談

1h 1ポテト

・勉強会

1h 1ポテト

- ・（真面目な感じの）相談 1 h 2ポテト
- ・お願いごと 1 h nポテト
- ・その他 1 h nポテト

※補足

1 h ↓ 1時間のこと。

1ポテト ↓ Lサイズポテト1つ分。

nの決定式 ↓ n || 状況 × 難易度 × 優しさ × 空腹度 + 気分。

なお、質問がある場合は氷川紗夜まで。

「……………どうしようこの人。なんだこの人。というか、nの決定式が示されてもよく分からないんだけど？俺にはこの式を解くこと出来ないんだけど？」

「あ、そちらは差し上げますので、今後の参考にしてください。ちなみに原本はしっかりとこちらで保管しておりますので、紛失した場合は遠慮なくおっしゃってくださいね」

「……………一体、今回はなんでしようね？」

「私は考えたんです。どうしたら、安定して慧人さんからポテトを奢ってもらうことが出来るかを」

「うん。意味が分かりませんね」

「いいえ、意味はあります。一応、慧人さんは白鷺さんと、仮とは言えお付き合いしている状態です」

ちなみにだが、俺と千聖が恋人（仮）であることは何人かは知っている。目の前の彼女もその一人だ。

「いくら私でも、彼女（仮）持ちのあなたから、無償で奢られ続けるのは気が引けるといふものです」

「うん。奢るって、基本はそういう裏がないから無償だと思っんですけどね」

「そこで閃きました。そこにあるように、私はポテトを受け取る。受け取った分だけ、私が働けばよいのだと。つまり、等価交換です」
「そうですか」

「そして、それを前もって言うておく必要があると思ひ、こちらを用意しました」

「へーい。ちなみに、10分とかで終わった場合の支払いは？」

「1時間分のポテトを支払ってもらいます」

「……………相手を間違えたなあ……………」

俺は空を見上げる。どうやら、相談相手を間違えたらしい。

いやね？本当はリサ姐…………Roseliaのベ이스トである今井^{いまい}リサの姐さんに相談したかったんだよ？でもね、リサ姐に聞いたら『ゴメンね☆おねーさんその日は忙しいかな』って返されたんだよ。で、紗夜さんに聞いたら即オツケーでここに至る。

「というか、やっぱり紗夜さんってポンコツですよね？」

「失礼ですね。暴言は1ポテトですよ？」

「器小さっ！一言暴言を吐くだけでポテトを、しかもLサイズを奢らされるんですか!？」

「相手を傷つける発言はよくないですよ」

「というか、傷ついたんですか？」

「いいえ、特には」

「じゃ、1ポテトは抜きですよね？暴言も相手を傷つけなかったら、ただの発言と変わりません」

「わわっ！凄^{すご}い傷ついたんです！そういうことにしておいてください！」

「嫌です。というかポンコツは属性であって、人を傷つける発言ではないですよ」

「そうなんですか？それは残念です」

「……………」

いや、もちろん人によっては悪く言われていると捉えられるが……やっぱりポンコツだなこの人。

「でも紗夜さん。これ、俺専用って書いてありますけど、他の人専用メニユーも作ってあるんですか？」

「いいえ。それに、作る予定もありません」

「そうですか？例えば、学校の後輩とか相手に作れば、ポテトをたくさ

「ん奢ってもらえると思いますけど?」

目の前の人はポンコツだが頭はいい。そして勉強を教えるときも理論を徹底的に叩き込んでくるため、テストの点数や成績アップが狙える。1時間1ポテトで勉強を教えてもらえるなら破格の安さだと思う。

「いいですか?いくら私とは言え、ポテトを貰えたら何でもするわけではありません」

「……………」

「何ですかその疑いの眼差しは?ポテトを貰えて何でもするのは、慧人さんだけです」

「へえーじゃ、例えば(ピーー)しましように言ったら、どれくらいポテトを支払えばいいですか?」

「うえ!?そ、そんな付き合っていない人同士で(ピーー)だなんて……ふ、不健全です!しかも、あなたは仮とは言え彼女持ちですし……ハレンチです!最低です!そうですね……白鷺さんに確認を取って……5ポテトをお支払いしていただければ……了承できますが……」

「どうしようか。あの計算式に、何を代入した結果5になったかがよく分からない。」

「いや、風紀委員。ここは、断るところだと思えますよ?」

「そ、そうですね!えーつと……6ポテト払ってくれないとお断りします!」

「いや、そういう意味じゃねえよ」

「しかも、ちやつかり5から6に増えたし。というか、ポテトを円とかドルとかと同じ感覚で使わないで欲しいんだけど?」

「じゃあ、俺以外の男の人が同じ事を言ったら?」

「吐き気がします。身体が拒否反応を起こしますね。二度と近寄らないで欲しいです。というか、視界にすら入れたくないですね」

「食い下がって、いくらでもポテトを支払うと言ってきたら?」

「断固として、お断りですね。そもそも口約束では信用出来ませんし、仮に公的な手続きを踏んでいる書類を差し出されたとしても、NOと

言って突き返しますね」

「じゃあ、俺は？」

「け、慧人さん相手なら……もちろん……オツケーですよ……」
「……………」

最近、身近な女子たちの価値観が分からないことに悩まされています。誰か教えてくれませんか？

「そう言えば慧人さん。私は何で呼ばれたんですたっけ？」

「ああ、まだ用件を言っていなかったっけ？」

「はい。そうですね」

「いや、少し相談したいことがあつて……」

「そうなんですね」

そう言うのと右手の人差し指と、左手の人差し指と中指を立てる。どうしたんだろうか？

「どちらですか？」

「いや、何がですか？」

「1ポテトコースか2ポテトコースか」

「いや、伝わらねえですよ」

「そ、そんな……！慧人さん、人差し指と親指で○を作ったら、お金とかオツケーって伝わりますよね？」

「まあ、伝わりますね」

「でしたら、何故……！何故、人差し指を立てても、1ポテトと伝わらないんですか!？」

「そんなん伝わるか」

「嘘ですよね!?!ポテト界限では常識ですよ!?!」

「すっげえ、狭そうな界限ですね。後、俺はポテト界限に属していません」

「そ、そんな……あなたと私で立ち上げたじゃないですか………忘れたんですか!?!」

「忘れた。というより、そんな過去は存在していない」

「あの時私にかけてくれた言葉は嘘だったんですか!?!『一緒にポテト界限を広めていこう』って、優しく手を取ってくれたじゃないですか

！」

「うん。そんなことしてねえよ?」

「……はっ!ま、まさか……頭を打って記憶が……」
「なくなってるないから」

「ちなみにですが、人差し指と中指を立てるとチヨキやVサイン、ピース以外にも、2ポテトの意味が出てくるんですよ?そこに薬指が加わると3ポテトとか……」

「知らねえです」

「そ、そんな……!」

両手で口元を抑え、今にも泣き出しそうな表情をする紗夜さん。

「可哀想……」

「オイコラ」

「いいんですよ慧人さん。なくしたものは仕方ないです。今から覚え
ていきましよう?…ね?」

何故、俺は哀れみの目を向けられないといけないのだろうか……

「……はあ……じゃ、2ポテトで」

「承りました」

そう言うと、伊達メガネを取り出した……ゴメン紗夜さん。ネタの
波状攻撃のせいで俺、もう疲れちゃったよ。今度は何ですかねえ?

「2ポテトコースなので私もここからは真面目にお答えしていきま
しょう」

「それって、今まで真面目じゃなかったってことですか?」

「いえ、今まで以上に気合いを入れるという意味です」

「……………」

胸を張る紗夜さん。それって、今までよりポンコツが加速するって
意味だろうか?

「それで?真面目なご相談というのは……」

「はい。何で……何で紗夜さんの胸って小さいんですか?」

「ぶっ飛ばしますよ!」

「あ、すみません。冗談です」

「あ、冗談でしたか」

「いえ、紗夜さんの胸が小さいのは本当だと思います」

「ぶちのめしますよ!？」

いや……ねえ。だって、妹の氷川日菜ひかわひなより小さいのは事実でしょ。

「冗談なのは相談の方ですよ」

「ええ。今、私も慧人さんに相談事が出来ましたが、お先にどうぞ」

「はい。実は……今度、1週間ほど合宿に行くことになりました」

「合宿ですか？部活……にしてはおかしな時期ですね。慧人さんの学校にはゴールデンウィーク、シルバーウィークに続くブロンズウィークでもあるのでしょうか？」

「いえ、ないですよ。しかも、学校の方じゃないです」

「学校じゃない？慧人さんは塾等に通っていませんし……」

「塾には通っていませんが、氷川塾の生徒第一号ですよ？」

「あ、そうでしたね。そう言えば入塾ポテトのお支払いがまだな気がします……」

「入塾ポテトに関する説明は受けていないので、払う義務はないはずですよ」

「……仕方ありませんね。それで何の合宿ですか？」

「サッカーです」

「あれ？部活じゃないんですよね？」

「ええ。実は、サッカーの日本代表U-18の候補に選ばれて……」

「おお！それは凄そうですね！」

「まあ、その選考合宿なんで……」

「なるほど。これはお祝いにポテトを送らなくては」

「あ、ポテトはいらないです」

「ほ、ポテトが……いらぬ……？」

「紗夜さん……？」

「この邪教徒がああああああ！」

「ええ!?!何で怒ってんの!?!」

急に怒りだしたよこの人。どうしよう？ポテト不足か？

「あなたの信じるポテト教への思いはその程度だったんですか!?!」

「いえ、俺が信じているのは一応クールビューティー教ですが……」

「いいですか？クールビューティー教の体現である私を慧人さんが信仰している。私はポテトを信仰している。つまり！慧人さんはポテトを信仰しているんですよー」

「最近のあなたは信仰対象か怪しいですけどね」

「つまり……心友ですか？」

「何をどうしたらそうなるか知らないですけど、もうそれでいいです」

ほんと、この人って出会ったときは、凄い刺々しく、冷たいオーラだったのに、今では何処かふわふわとした、ポンコツ漂うオーラを感じる。成長……したのか？人によってはこれを退化というのではないのか？

「……それで、ポテトはおいといてですね……」

「はい」

「お互い忙しそうなので、一週間近く彼女(仮)である千聖と連絡を取るつもりがないので……合宿明けに何かした方がいいかなって考えているんですけど……」

「そうですね……」

顎に手をやって少し考える紗夜さん。先ほどまでと違うこの空気。

これはいい返答がきそうだな。

「……ポテトパーティーとかどうでしょうか？」

期待した俺が馬鹿だった。

「……この相談はなかったことにしてください」

「え？ポテトで喜ばない人が居るんですか？」

「恐らく、99%以上の人々が喜ばないかと」

「ちなみに私は喜びます」

「知っています」

……やっぱりダメだったか……

「後は……ポテトデートですかね」

「ポテトとデートするんですか？」

「いえ、近くのファストフード店を巡ってポテトを食べ歩くんです」

「……やっぱり、この相談はなかったことにしてください」

「そ、そんなあ……じゃあ、ポテトのお支払いは……？」

「そりゃあ、なかったことに……」

「……………」

すると、凄い哀しそうな瞳を向けてくる。……はあ。

「……分かりましたよ。しつかり2ポテト支払いますよ」

「やったあ！」

嬉しそうな感じで両手を掴んでブンブンと振ってくる。

最近、思ったこと。俺つてもしかして、身近な女性に弱いのでは？
結局最後はこんな感じになるし……うん。もう少し心を鬼にしない
といけないのか？

……まあ、でもデートはありか。何か考えてみるか……もちろん、
ポテトは抜きで。そういや、まともなデートしたことないし。

「ところで、紗夜さん。さっき、相談が出来たのかなんとか」

「ええ、慧人さん」

そうすると、紗夜さんは神妙な面持ちになる。なんだろう？ そんな
に重大なことなのだろうか？

「どうしたら私の胸が大きくなりますかね」

「よし、帰りましょうか」

「ええっ!?無視しないで下さいよ！」

「帰り道で2ポテト払いますから」

「よし、行きましょう！すぐに行きましょう！」

勢いよく立ち上がったって、腕を掴んで真っ直ぐファストフード店に向
かう。ああ、何というか……この人、ポテトになるとチヨロいけど本
当に大丈夫か？お兄さん心配だよ。

女神が〇〇になった日

どうしてこうなったんだらうか？

「り、リサ姐……？」

「……………」

俺の部屋にて、目の前に居るのはリサ姐。あのRoselia……紗夜さんと同じバンドのベース担当にして、一見するとギャル。中身は、料理が得意で家庭的だったり、お化けや虫が苦手だったり、面倒見がよかったりと……人は見た目で判断してはいけないと、この人に教えてもらった気がする。

「……………」

巷では彼女のことを慈愛の女神と呼んでいる……もはや、神格化されている彼女であるが……

「あのーそろそろ何か言ってくれませんか？」

「……………」

何故かそんな彼女が犬耳を付けて、首輪のような装飾品を身につけ、更にはコスプレで使うような犬の尻尾まで身につけている。何だろこの状況。

「……………」 (すりすり)

しかも、さつきから無言で胸の辺りにすり寄ってきている。本当になんなんだらうこの状況。

勘違いしないで欲しいのは、決して俺がやれと言ったわけでも、弱みを握っている訳ではない。むしろ、この様子を彼女(仮)であるド変態に見られた日には、厄介なことこの上ないって考えると、立場が弱い俺だから。絶対にヤバいことになるから。

「……………」 (じー)

すると、俺の方を無言で見ってくる。え？どうした？

「……………」 (ふんっ)

……なんだろうか？もしかして、俺の考えていること読まれたのか？

「……………」 (くくく)

……………ねえなんなの？俺の心を読めてもいいことないよ？

「……………(じー)」

再び俺の方を見てくる。いや、俺には人のオーラを感じ取れても、相手の考えていることを読む力がなくてですね……………はい。察しろって？そんなの俺に求めるな。

「……………」

「……………♪」

とりあえず頭を撫でることにしたが……………うん。表情的に当たりらしい。

少しすると、顔を左右に振ってきた。一旦、手を放すと今度はさっきより顔をあげている。ふむ……………

「……………」

「……………♪」

顎の下を撫でることにすると、再び上機嫌な感じになる。ふむ……………この肌触り……………なんだか癖になりそうだな。

それにしても、このリサ姐……………いや、リサ犬。本当に喋らないんだけど……………うーん？まあ、いつか。気楽に行こう。

およそ一時間後。

「んー……こういう何にもない時間もいいよね」

ようやくと言うべきだろうか。リサ犬がようやく喋った。

「何にもなくはなかったと思いますけど?」

「そう?だって慧人くんって、可愛い女子をペットにする趣味があるんでしょ?」

「んな趣味ねえです」

なんだそのヤバいやつは。そんな趣味を持っているやつがいたら流石に引くわ。

「アタシ、分かったの」

「なんだらう。今のリサ姐からは何も聞きたくないけど、どうぞ」

「ペットなら浮気にならないんじゃないかって」

「……………ん?」

どういうこと?俺、何も分かんなかったんだけど?

「いい慧人くん?飯とはいえ、お付き合いしている女性がいる男性と、こうして二人きりで会ったり、スキンシップをした場合は浮気認定されてもおかしくないと思うの」

「誘ったのリサ姐ですけどね。まあ、否定はしません」

「でもよく考えて欲しいの。ペットって浮気相手にならないでしょ?」

「まあ、ペットに浮気とか意味分かんねえですしね」

「つまり!アタシは慧人くんのペットになれば、何しても浮気にならないんだよ!」

「何言っているのこの人!」

あのまともで精神安定剤(?)だったリサ姐が壊れたんだけど!何かヤバい病気か!?

「ある意味病気だよ……」

「すみません。普通に俺の心の声に答えないでください」

「そう……恋の病気……かな」

「人の話聞いて!」

……どうしよう。今日のリサ姐マジで話が噛み合わない。え?何

かヤバいもの食べた？え？嘘でしょう？

「……いや、リサ姐をペットにするつもりなんて微塵もないけど……」

「ええっ!? あんなに可愛いがってくれたのに!」

「あなたが犬に成りきっていたからでしょうが」

「成りきっていたんじゃないよ？あなたの犬になったんだよ？」

「認めてないけど？」

「そんな！」

「……おつかしいなあ……リサ姐ってまともな枠組みに入っていたんだけどなあ……あれ？このまま行くと……ヤバい方の枠組みに入っちゃうんだけど……もう片足どころか両足突っ込んでいるんだけど……」

「……千聖からはオツケーもらったのに……」

「何してんのアイツ!」

「酷いよ……何で千聖はオツケーなのにアタシはダメなの!」

「おかしいな。俺はアイツがペットになることも容認した記憶ないんだけど？」

「酷い……千聖が一人目のペットでアタシが二人目のペットって話でまとまったのに……」

「まとめないで？頼むから俺のいないところでまとめないで？」

何？ちよつと待って？アイツもう俺のペット認定なの？彼女は？

彼女ってのはどこに消えた？アイツって本当は彼女じゃないのか？

「だって……千聖とは首輪にリード付けて、夜にお散歩をしたって聞いたよ！」

「Just a moment!」

That's a terrible misunderstanding!

「慧人くん？急に英語を話してどうしたの？」

「Is it okay?」

That was not a walk.

That was deceived.

「落ち着いて？ほらアタシも1割ふぎけたけど、落ち着いて？」

「……………」

「1割って…………9割本気じゃねえか…………！」

「落ち着かないなら…………揉む？」

「よし、落ち着いた。落ち着いたから大丈夫だ」

「そう？」

「リサ姐。俺、思ったんです。千聖はド変態、紗夜さんはポンコツなんです」

「ふむふむ」

「そこでリサ姐が変態枠になってしまうと…………」

「興奮する？」

「違います。俺の胃が死にます」

「あ、胃薬いる？」

「大丈夫です。たくさん貰っているので」

「うーん…………あ、じゃあ、純粋なヒロイン枠はどう？」

「どうって、さっきまでの会話からもう戻れない気がするんですけど…………」

「そうだよね…………もう、アタシと慧人くんはあの頃には戻れないんだよ…………進むしかないんだよ」

「そうですね…………」

「だから、一緒に行くところまで行こうよ！」

「…………何なんだろうなー…………大丈夫かなー」

「え？だって、慧人くんって変態な女の子が好きなんでしょ？」

「どうしてそうなった!？」

「だって、千聖のこと好きじゃん」

「いや、そこは否定しないけど…………ねえ？」

「それ、千聖が変態って言っているような…………いや、今更か。」

「それで、アタシのことも好きでしょ」

「どういう流れでそうなった？」

「…………え?…………嫌い…………なの?」

「いや、嫌いじゃないですけど」

「じゃあ、好きなの?」

「まあ、友人としては好きですよ」

「よかったーアタシも慧人くんのこと好きだよ☆」

「そうですか?」

「うん。——アタシのご主人様として」

「だから主従関係を結んでねえよ!?もしかして、メイドとかそういうの目指し始めたの!?!」

「ううん。もちろん、ペットとしてだよ?」

「そこでもちろんとか言わないで欲しいんだけど!?!」

それならまだメイドと雇い主の主従関係の方が何倍もマシだわ! ペットと飼い主的なのはやめてくれ!?

「……とうかさ、なんでペットになりたいとか言い出したんだ?」

「^{願望}なりたいたいじゃなくなつた^{過去形}だよ?」

「だから認めてねえよ!?!……いや、浮気認定云々って言つてたけど、よく考えなくても千聖に許可もらえばオツケーだし、俺が仮に変態が好きでももつと、別のアプローチがあるだろ?なんで、ペットになつたとか血迷つた、とち狂つた、訳の分からないことを言い出したんだ?」

「そうだね……それはある日のこと……普段は圧たつぷりの慧人くんが、道端で迷子の子犬を見つけました」

「……ん?」

「最初は子犬に恐れられながらも、勇気を持って近づいてくれたその子を優しく抱いて、主人を探しに一緒に歩く姿……時折、撫でてあげながら、優しく接して……」

「ちよつ!?!見たたのか!?!」

クソつ、あの時は子犬に集中して周りのことを無視していたが、よりによつてリサ姐に見られていたとは……!?!

「主人が見つかった時は少し喜び、子犬を引き渡した後は少し寂しきを感じ……でも、アタシたちとその後会つたときは何もなかったように接していて……心に來るものがあつたよね」

「やめてくれ!?!マジでやめてくれ!?!」

「……………(にっこり)」

「そんな目で俺を見ないでくれ!いや見ないで下さいお願いします」

「そう？アタシ的には、慧人くんのペットとして成長できるなら全然オツケーだよ？」

「……………」

どうして俺の身近な人（特に異性）は残念なんだ？俺と親しくなればなるほど壊れるんだ？何だ？見えない何かがある、俺の周りの人間の頭を壊している気がする……………」

「……………えつとですね。本題は、今度千聖をデートに誘おうと思うんです」

「ふむふむ……………首輪つけてお散歩？」

「いえ、普通のデートです」

「慧人くんの家で？」

「いえ、偶には一緒に出かけようかと」

「ホテル直行の？」

「いえ、ホテルには行きません」

「……………もしかして……………あの千聖と健全なデートをしようとしているの……………!?!」

「何でそんなに驚いているんですかねえ」

「いや、無理でしょ。アタシとも無理だと思っようよ？」

「おかしいな。普通の健全なデートが、何でそんなにハードル高いんでしょうね？」

「高いに決まっているじゃん。いい慧人くん。普通の中学生高校生がやるような、ピー音禁止縛りの、待ち合わせをしっかりとって、二人きりで一緒に出かけて、路地裏にもホテルにもお互いの家にも行かないなんて、アタシたちにとっては最高難易度なんだよ？」

「完全にアンタらのせいじゃねえか」

そもそもピー音禁止縛りって何だよ。普通のカップルはそんな縛り、縛りじゃなくて普通だよ。というか、待ち合わせをするって……………いや、気付いたらこの人たちが家の前にいるか、家の中にいるけどさ。「でもさー慧人くん。例えばだけど、手を繋いだら胸を押し当てたくならない？」

「さては痴女ですか？」

「ううん。慧人くんのペット」

「おて」

「わん♪」

「おかわり」

「わん♪」

「おすすめ」

「わん♪」

「ふせ」

「わん♪」

「……………」

「わんわん♪」

「どうしよう。何でこんなに楽しそうに言うことを聞くんだろう。もう価値観がよく分からないよ……」

「それで、色々と考えたんですけど……」

「わんわん」

「…………そろそろ戻ってくれないか？」

「わん？」

「……………」

「どうしたら戻るんだろう？というか、どうしてその体制で、そんな何かを期待するような目が出るんだろう？」

「……………（すりすり）」

「ああ、撫でればいいのか。」

「……………（こくこく）」

「当たりなのね。そして、当たり前のように心の中を読まないで欲しい。」

「ということ、撫でることにしたが……」

「いい？ 飴と鞭が大事なんだよ」

「そうですか」

「アタシのようなペットには飴の割合を増やすといいよ♪」

「一生使わない知識ですね」

「え？ これから一生使える知識って？」

「……………」

もうやだこの人……

「ちなみに躑にはお尻を叩くといいよ」

「そうすると?」

「喜ぶ」

「それ、躑じゃねえじゃん」

「それで? 千聖とのデートプランってなんか考えているの?」

「あーその場のノリだと絶対アウトだから、一応は考えたけど……」

「でも、今思うとアレだね。他の女の子とのデートプランを一緒に考えるって、中々鬼畜だね♪」

「そうですか?」

「うんうん。……だって、好きな人と別の女の子のデートプランを、いくら相手が千聖とは言え、考えるのは来るものがあるよね」

「じゃあ、今度デートしますか?」

「……………」

「ちよつと先の話になるだろうし、千聖にも言わなきゃいけないけど」
「……………」 うん。期待している」

この後、なぜか急に真面目になったリサ姐と一緒に考えるのだった。まあ、相談が終わったら残念な方に戻ったけど。

しかし、この時の二人は知らなかった。まさか、二人のデートがあるんなことになるなんて……

合宿前日は波乱の連続

俺がサッカーのU-18日本代表候補に選ばれたのは少し前のこと。ある試合で、俺はそういうスカウトの目に止まったらしく、そのまま何回かの視察やデータを通し、候補という形で選ばれ、今回の合宿に関する話を頂いた。俺はその場で返事をし、参加することを決意した。

明日から行く合宿は、日曜日から木曜日までの4泊5日と少し長い。しかも、長期休みではなく平日に行くため学校の方にも休む旨を伝えておいた。もっとも、修学旅行みたいに楽しんでいくというより、自分自身の今後がかかった大事で重い合宿である。

そんな合宿の前に普通なら緊張をしていたりとか、軽く練習したりとかいろいろとあるだろう。そう普通なら……

「千聖？何この状況？」

「ふふっ、見てわかるでしょう？」

「見て分からないから聞いているんだが？」

昼寝から目が覚めるといつも通り千聖がいた。もはや、彼女が俺の部屋にいることに慣れ始めた自分が居るが、今回はそれだけではなかった。

「縛ったのよ」

「何故に？」

そう、目が醒めたら、お腹の上に乗っている千聖。いつもとは違い、何故か両手と両足を縛っているのだ。

「いや、本当に何で？何でお前が縛られているの？」

ただし、千聖の両手と両足がだったりするが。

「慧人。私はね、思ったのよ……もしかして、私はド変態じゃないかって」

「何を今更」

「それでね、極秘にアンケートをとったのよ」

「アンケート？」

「ええ。ある人に頼んで『変態なのはどっち？』ってことで票を集めた

わ。その数実に343票」

「へー……やけに具体的な数字で……ん？どっち？」

「ちなみに候補は私とあなたよ」

「勝手に巻き込むなよアホ。二択のうちに勝手に加えるな」

「それでね、つい先日集計したのよ。ああ、安心してちょうだい。紙媒体じゃなくて電子媒体……偽装はしていないわ」

「ふーん。まあ、何でもいいけど。どうせ、全員お前が変態って答えただろ。満場一致ってやつだろ」

「アンケート結果、実に309票……つまり90%の人が私が変態だと答えたわ」

「へえ……そんなに……ん？残りの10%は？無効票でも出たのか？」

「何を言っているの？あなたが変態と答えたに決まっているじゃない」

「……………は？」

待て待て何を言っている？俺がコイツより変態と答えたヤツが居るだど？そりや、300人以上答えればネタで1人や2人は俺と答えるだろう。でも10%は明らかに多いだろ。大体350の10%だから……30人は居るのかよ。

「……ああ、そういうことか。きつとそうに違いないな」

「慧人？」

「きつとそいつらはお前と答えようとして間違えてしまったに違いない。ああ、そうだそうじゃなきゃ、俺が千聖より変態なはずがない。

ああ、そうだ……」

「うーん……間違えて押すような要素はないと思うのだけど……」

「なあ、千聖。知っているか？」

「何を？」

「俺に票を入れたやつを消せば……」

「はっ、私にしか票がなくなってしまう」

「そういうことだ。さあ、アンケートを答えたヤツを教えてくださいよ。一人ずつ締める」

「でも残念ね。匿名でのアンケートだから把握していないわよ?」
「畜生!」

「ふふっ、愚かね慧人。もし、特定できていたら……」
「特定できていたら?」

「私が見んの……コホン。ちようきよ……コホンコホン。お話して、
慧人が変態ってことにしていたわ(▽)()」
「……………」

笑顔で言っているけど……コイツ……もしかしてヤバいのでは?
前から思っていたけどヤバいのでは?

「それでね、慧人。そのアンケートの結果が現状に繋がるのよ」
「いや、何をどうしたら繋がるんだ?」

アンケートを取ったのは分かった。集計結果も分かった。で?何
でコイツが自分で自分を縛ったことに繋がるんだ?いや待てあの千
聖のことだ。こいつは変態だが馬鹿じゃない。つまり、何か深い思惑
があるはずだ。

「……………もしかして」

「分かったかしら?」

「ああ、お前はこのアンケート結果に満足していない」

「(*。ω。)()コクコク」

「何で、私が100%じゃないんだと。10%の人は何で慧人を選ん
だんだと」

「……………は?」

「だから、残りの10%を分からせるため、自らが変態であることを示
すために、自分で縛られたんだと。こういうことをするんだぞという
意思表示のために……………」

「……………はあ?」

「そうか……お前の思い、確かに受け取ったぞ。俺は温かい目で見て
やろう。とりあえず、明日からの合宿に向けて買い出しに行きたいか
らしばらくはらくいなくなるわ」

「……………待ちなさい(^—^)」

「……………放せよ変態。放さないで、俺が動けないだろ?」

起き上がった、立ち去ろうとする俺を身体をはって止めてくる。おかしいな？俺の推理は完璧。だからこそ、変態を捨て置いて去ろうとしたのに。

「放さないわよ。大体、推理が間違っているのよ」

「はあ？どこが？」

「逆よ逆。何で90%の人が私を選んだのかが不思議だったの。それでね、分かったの」

「何が？」

「慧人の変態さを理解できていない人がたくさん居ると言うことに」
「……………」

いや、どうやってもお前には勝てねえよ。お前がナンバーワンだよ。

「そこでね。慧人の変態さを引き出すために自分で縛られたのよ」

「どういうこと？」

「きつと、慧人は今、私を襲いたくて仕方ないはずよ。抵抗できない私を……………あられもない姿にしたいはずよ」

「はあ……………」

「それでね。普通の人は(ピーー)で終わりがかもしれない。でも、慧人はそれで終わらないわ。きつと(ピーー)から(ピーー)して(ピーー)よ。その証拠に調教するための道具がベッドの下にたくさんあったわ」

「そんなわけ……………」

千聖を両手で持ち上げてベッドの上に置いておく。立ち上がった俺は、何か嫌な予感がしたのでベッドの下を覗き込む。

「おい」

「はい」

「おい」

「はい」

「おい」

「はい」

ベッドの下から出てきたのは、ムチ、猿轡、手錠、エロ本……………後は

もう口に出すのも考えるのも避けたいものの数々……。一応言っておくと、エロ本の表紙がノーマルではなくアブノーマルな感じで、おそらくそういうのに使う系のグッズだろう。というか、ベッドの下に置くためか、一部のものはジップロックというかホコリがつかないように、包装までしてある。いらねえよそんな丁寧な仕様。

「仕込んだろ」

「仕込んだわ（ー、ωー）？ドヤツ」

「捨てるぞ」

「（；、・、ム・）ナン…ダト!？」

「何だその顔」

「喜ぶと思ったのに……おかしいわ」

「おかしくねえよ。こんなの見て喜ぶか。とりあえずエロ本燃やして、そこで焼き芋でも作るか」

「な、なんてことを!？それは私の大切な愛読書よ!」

「興味ねえ」

「慧人……よく考えてちょうだい。それはエロ本ではないわ」

「じゃあ、なんだよ」

「保健体育の参考書」

「知るか。燃やす」

「この人でなし!」

「大体お前何歳だよ」

「17歳よ」

「ここに18禁って書いてあるだろうが」

「慧人、考えてちょうだい。18歳も17歳も四捨五入すれば同じ歳になるわ」

「……………」

立ち上がって去ろうとする。

「もう一回!もう一回だけ弁明のチャンスを……!」

「一回だけだぞ」

「今は12月頭。私の誕生日は4月6日……つまり私は正確には17歳と8ヶ月……4ヶ月は誤差よ」

「……………」

「え？ちよつ、無言でいきなり……あ、それは手錠……」

カチャリ

「ちなみに、その手錠はとある伝手で本物よ。鍵がないと解除でき……むぐ」

「今からさつまいもを買ってくる。おとなしくしてろ」

「むむー！」

とりあえず猿轡を取り出して、啞えさせる。そして部屋を去る。

……はあ、コイツはマジでどうしようもないな……

「ついでに夜ご飯も考えるか」

「むーむーむー（ふっふっふっ）」

慧人が出て行った中、私は一人笑っていた。ここまで作戦通りだと。本当はこのまま襲ってくれるのを期待していたけど、こうやって放置する展開も充分に考えられたわ。

「むーむー（だけど甘いわ）」

手と足を縛ってある紐は、簡単に解けるように仕込んである。手錠も、外すには鍵があるけど、その鍵は最初から私の手の中……勝ったわね。右手とベッドの柱が手錠で繋がれているけど、とりあえず縄を

ほどくわ。そして、鍵を取り出……………鍵を……………鍵？

「むむ……………む？（ポケットに……………ない？）」

おかしいわね。確かに入れたはずよ。そう確かに……………あれ？ないんだけど？おかしいわ……………いや、本当にないんだけど？

「む……………（あ……………）」

そう言えば、一瞬だけど慧人が私のポケットを触ったような……………私に手錠をつける時に、鍵のあったポケットを一瞬だけ触っていた気がする。……………あら？もしかして、あの男ってスリの天才かしら？

でも、こうして思うとアレね。慧人に無理矢理手錠で拘束され、部屋で放置されている……………放置プレイ……………（； 旦、）ハアハア……………

1時間後……………

「む、むう？（あ、あれ？）」

時計を見るに1時間くらい経っていないかしら？いくらなんでも、遅すぎないかしら？買い物に行っただけでしょう？そろそろ帰ってきてもいいと思うのだけど……………え？本当に遅くないかしら？もしかして、何かあったのかしら？いえ、あの慧人に限ってそんなこと……………

「そろそろ行くか」

時計を見て時間を確認する。

毎回毎回、アイツのアレな言動、行動に巻き込まれるため、今回は

少しだけ放置することに決めた。まあ、ちよつとした罰つてとこだな。

時間を稼ぐために公園でサッカーの練習をしていたが、サツマイモを買いに行くか。

「にしても、鍵だけポケットに忍ばせていたとはな」

まあ、縛っていたロープ……あの感じなら自力で解けるものだろう。片腕封じたただけだし、問題はないはず。

「大体二時間か……ちよつと長すぎたか？ただいまー」

買い物が終わらせて家に着く。荷物だけ置いて、自分の部屋に行くことに。

「そろそろ反省し……ちよつ、何で泣いているんだよ!？」

てつきり興奮しているか反省しているかと思ったのに、泣いているのは流石に想定外なんですけど？

「慧人……!？」

急いで、手錠と猿轡を外すと、胸元に飛び込んでくる千聖。

「バカ……!いくらなんでも遅すぎよ……! 凄い心配したじゃない……!」

「それは……悪かった」

「ううっ……でもよかった……! しっかり帰ってきてくれて……!」
「……………」

何というか……ちよつとやり過ぎたか。まさか、そこまで心配させているとは思わなかった。

そのまま彼女が落ち着くまで待つことに。そして、ようやく落ち着いてきたのか、いつもの感じに戻った。

「いい？物事には限度があると思うのよ」

「千聖さん。一回放しませんか？」

「いやよ。もう放してあげないわ。今日はこのまま離れないわよ」
「それは支障しかないだろ」

「だから、お風呂もトイレも一緒よ」

「嫌だよ。というか泊まるつもりだったのか？」

「さつき、お母さんとお義母様にオツケを貰ったわ」

「俺は？」

「必要ないでしょう？」

いや、あなたの言うお義母様はですね、今日も帰るのがとても遅いんですよねはい。だから俺の許可の方が……ああ、もういいか。

「……はあ。まあ、いいけどさ。で？物事には限度って？」

「そうよ、限度よ。あなたはさつまいもを買いに行くと言ったわ」

「言いました」

「普通なら、それに3、40分くらいかかるでしょう。でもあなたが帰ってきたのは2時間後……分かるかしら？遅すぎなのよ」

「それは反省しております」

「いい？確かに私は最初の方は興奮していたわ。興奮して興奮して（ピーー）を」

「おい」

「でも、一時間を超えた辺りから興奮じゃなくて心配が強くなったのよ。何かあったかという心配、捨てられたのではないかという恐怖……」

「……………」

「慧人……私はきつと世間一般でいう所の変態よ。でもね、こんなことで興奮し続けられるほど終わっていないわ」

「……今回は俺も悪かったよ」

「ええ、そうね」

「次からは時間を言ってから放置するわ」

「そうしてちようだい（*?、）??ウンウン」

……………あれ？何か違うんじゃないか？

「さてと。じゃあ、焼き芋でも作ろうぜ」

「慧人。今、限度の話をしたわよね？」

「したな」

「それなら、エロ本を燃やすことは限度を超えて居るんじゃないかしら？」

「……………そうだな。確かによくないな」

「ええ。分かったなら私に返却を……」

「廃品回収に出すか。紙という資源として有効活用しよう」

「待つてちょうだい。私に返却する方がエロ本も喜ぶわよ」

「興味ねえ。コイツは紙ゴミとして出す」

「Wait a minutes! 弁明のチャンスを！」

「……一回だけだぞ」

「慧人、中身を見て判断して欲しいの。確かに表紙やタイトルがアレでも、中身は実はまともかもしれないわ」

「ふうーん(？?）」

「ということ、パラパラとページをめくる。なんだろう。何で女子とエロ本を見ているんだろう。」

「分かったかしら？」

「ああ。ゴミとして出すこと決定な」

「何でそうなるの!?(?□?)ノ」

「何でそうならないと思った?、(ーー)ノ」

「とりあえず、後日ゴミに出すと言うことで、焼き芋は別で作るとしよう。」

「ほら、例えばこのページを改めて見てちょうだい！」

「SMプレイのどこじゃねえか」

「参考になると思わない？」

「思わない」

「興奮しない？」

「しない」

「私たちに必要だと思わない？」

「思わない」

「……………つまり？」

「これはゴミだ」

「そ、そんなあ……………」

両手を床に付き、両膝も付いている。絶望してますます感じてヒシヒシと伝わってくる。なんだろう……………普通の男子高生と普通の女子高生なら立場が逆なんだよなあ……………一般的なイメージだと。

「料理するからそのまま離れてろ」

「はい……」

そう言っつてしよんぼりしながらソファで横になる千聖。そんな彼女を尻目に料理をすることに。

「慧人」

「何だ？」

「明日からよね」

「まあな」

「……頑張つてよ」

「ああ」

「……寂しかったらいくらでも連絡していいからね」

「心配してくれてありがとな。でも、大丈夫だから」

「……そう」

「……なあ、千聖。合宿終わったらさ、デートに行かないか？」

「……へっ?」

トントントン……と、包丁で食材を切る音だけが響く。

しばらくの間、返答がなかったので千聖の方を振り向くと……凄じ顔顔を赤くしていた。

「千聖? 聞こえていたか?」

「……え、ええ、聞こえていたわよ。デートよねデート……お家デート?」

「偶には一緒に外に出掛けようぜ」

「そ、そうよね……えっと、ホテルに行くのよね?」

「行かねえよ」

「じゃ、じゃあ……首輪をつけてお散歩?」

「しねえよ」

「ま、まさか……! 普通のカップルがするような普通のデートなの……!?!」

「そのつもりだけど?」

「そ、そんなのハードルが高いわ……!」

おかしいな? 何でハードルが高いのだろうか。少なくとも、ホテルや首輪付きの散歩に比べれば低いと思うのだけど。

「せ、せめてパンツは……！パンツは履かない感じでどうか……！」
「普通に履けど変態。そういうのはなしでデートしようって言うてるんだけど」

「む、無理無理！そんなの身が持たないわ……！」

身が持たない……？……まさか、変態としての本能を押しさえつけるから身体が持たないとか？変態発言、行動をしないと身体が限界を迎えるとか？

（そ、そんな……！普通のデートなんて……ううっ……す、凄く嬉しいのに……緊張が……震えが……！ど、どうしましょう……！何かやかかしちゃって、嫌われないかしら……？だ、大丈夫よね……？）

「気楽に行こうぜ」

「き、気楽って……この手慣れた感じ……やっぱりあなたはプレイボーイなのね！」

「いや、違うが」

「で、デート……うう……嬉しいけど……」

「……千聖。この後一緒に風呂に入らないか？」

「もちろんいいわよ！あ、水着とかタオルはなしね！」

「普通のデートは？」

「そ、それは……その……いいけど……こ、心の準備が……」

「……………」

俺の感覚がおかしいかは知らんけど……逆だよな？普通は逆だよな？

「……慧人」

「何だよ？明日は朝早いから、さっさと寝るぞ」

あれから食事も終わり、風呂も入り終えた俺たち。風呂はある意味攻防戦だった。一緒に入ろうとしてくる変態をおさえ、なんとか一人で入ることが出来た。ちなみに、その後千聖は不機嫌になっていたが知らない。

そして、就寝前。荷物の確認を済ませ、彼女の分の布団を敷く。

「……迷惑だった？」

「………はあ？何を今更」

「そうよね。迷惑だったわ……きやつ」

俺は彼女をベットに押し倒す。

「け、慧人……？」

俺はお前くらいなら簡単に押し倒せる。本当に迷惑なら力尽くでお前を追い出したり、動けなくするくらい出来る。……そもそも、迷惑だと思っているヤツの分の飯まで作るほど優しくねえよ」

「………っ！」

「だから、好きにしろ。代わりに俺も好きにする」

すると、着ている服を脱ごうとする……

「おい」

「はい」

「おい」

「はい」

「何故脱ごうとする？」

「え？だって、私のことを好きにするんでしょ？私のことを滅茶苦茶にするんじゃないの？性欲に任せて獣のように私を貪り尽くすん

「じゃないの?」

「しねえよアホ」

「そ、そんな……慧人が珍しくそういう空気を作ったと思ったのに……」

「作ってねえよ。さっさと寝るから電気消すぞ」

「はい」

「お前の布団はこっちだ」

「私は慧人の抱き枕」

「違うが?」

「慧人は私の抱き枕?」

「それも違うが?」

「慧人と一緒に寝ることで、私の睡眠の質に30%のバフがかかるわ」
「どんな効果だよ……はあ。まあいいわ」

「ということとで電気を消す。布団がいつもより狭く感じるが……もういいや。」

「……好きよ。おやすみ」

「おやすみ」

この後、すぐに寝た。

そして、合宿当日の朝、4時30分頃……

「んじや、もうすぐ迎えが来るから」

今回の合宿では合宿場に現地集合になっている。俺は友人であり、一緒に選ばれていた東雲と共に、いつもお世話になっている先輩が送迎してくれることになっていた。

「ふああああ。慧人に千聖ちゃん、おはよー」

「おはようございます。お義母様」

「おはよ」

「んーじや、頑張っていてきてねーお母様はもう一眠りするからー」
ひらひらと手を振りながら、そのまま部屋に戻っていく。ただ顔を
見に来ただけかい。……でもまあ、あの人は昨日も夜遅くに帰ってき

たんだろうし、わざわざ起きて見送るなんて……

「そろそろ着いたか。んじゃ、千聖……」

俺は靴を履いて千聖の方を振り返る。そして、

「……………んっ。いつてきます」

「……っ!!い、いつてらっしやい……」

彼女を抱き寄せてキスをすると、荷物を持って扉を開け放つ。目の前に止まっている車を確認し……じゃ、やりますか。

「ひゅーひゅー。若いっていいわね」

「おおお義母様!?!見ていたんですか!?!」

「まあね、そりやあもうバツチリ」

「あう……………」

「ふふふっ♪これは本当に彼女になる日も近いのかしら♪もしかしたらその先も……………」

「そ、それは……………そうなれたら嬉しいんですけど……………」

「……………ほんと、あの人にも見せてあげたいわ。今の成長した慧人と、千聖ちゃんを」

「……………え?それはどういう……………」

「んーお母様は眠いのでおやすみー千聖ちゃんも慧人の部屋でゆっくりしていいからねー」

「は、はあ……」

本当に部屋に戻る慧人母。

(今のつて……う？あの人ってどういう……？)

考えようにも頭が回らない。彼女は休むことにして慧人の部屋に戻るのだった。

番外編 消えないで千聖！あなたが消えたらこの世界はどうなるの!? 慧人が必ず解決するからそれまで耐えていて！年末最後の最悪の戦い勃発！……………年越しに何してんだこいつら？

12月31日……大晦日。その日の夜は何をして過ごしますか？
テレビを見る。いつも通り寝る。友人と話す。ゲームする……色々とあるでしょう。

では俺はどのように過ごしているか……

「ああ、慧人。もうすぐ私は消えてしまうのね……」
窓の外を見ながら儂げに呟く千聖。

12月31日の22時頃……白鷺千聖は俺の家に居た。新年は早々にPastel*Palettesとしてロケもあり、忙しそうな年始を過ごす彼女。年末と一緒に過ごしたいという彼女の数少ない(?) 我が儘と一緒に過ごしている……が、なんか彼女の纏う空気が若干重い。

「(⊗ ? ⊗) ”??”

が、そんなことは無視をする。こたつに入り、ミカンを食べながら、テレビでやっている年末の特別番組を眺めている。

「……ああ、慧人。もうすぐ私は消えてしまうのね……」

「(⊗ ? ⊗) ”??”

「……ああ、慧人。もうすぐ私は消えてしまうのね……」

「(⊗ ? ⊗) ”??”

「(∨ ^ #) イラッ?!”

ピッ

テレビの電源が落とされる。そして、目の前からみかんが取り上げられた。

「慧人。私とみかん……どちらが大切かしら？」

「お前」

「それなら大切な私の話をどうして無視するのかしら？」

いのよ」

「年越しそば食うか？」

「あなたのを少し貰うわ……じゃないのよ」

「本年もありがとうございました」

「あ、こちらこそ……じゃないのよ」

「では良いお年を……」

「寝かせないわよ」

場所を移動し、俺に背中を預ける形で座る。

「……（ピーー）が勃起していない……」

「何でこのタイミングでしていると思っただよ」

「していたら挿れてもらえたのに……」

「そんな年越し嫌だよ」

「ちなみに私の心の（ピーー）は勃起しているわ」

「興味ねえよド変態」

「分かったわ。あなたの（ピーー）も今からたたせましょう」

「さてはお前、何も聞いていなかったな？」

千聖が手を伸ばしてきたのでその手を掴み、抱きしめるようにして

彼女の身動きを封じる。

「……でも、慧人。これで分かったでしょ？」

「何が？」

「私が消えてしまうと云った理由が……」

分かるかー………ん？いや、もしかして……

「………そういうことか……クソツッ！」

「ええ、気付いたようね……」

「そんな………！もうすぐ年越しと言うことはアレがあるのか………！」

「ええ、その音色は特定の思想を全てかき消してしまい、抹消する……

年に一度の、大掃除よ」

「畜生………アレばかりは俺でもどうしようもねえ………！」

「だからね………慧人。もし私とその音色で天に消えたら………笑顔で見

送ってくれる？」

「そんなこと………出来るわけねえだろ！」

「お願い……最後のお願いよ」

「ダメだ！いくら何でもそんな願い、聞けるわけねえだろ！」

「どうして……どうして聞いてくれないの？」

千聖の肩が震えている。それと同時に、外れて欲しかった自分の予想が当たっていることに気付いてしまう。

「当たり前だろうが……だって……！」

俺は思いの丈を彼女に告げる。

「除夜の鐘の音で消えたとか、どんな表情して見送ればいいんだよ!？」

「笑顔で……いいのよ」

「よくねえよ!? ハッピーエンドじゃねえんだし、除夜の鐘の音で消えるとか、お前は煩惱の塊かよー!」

「控えめに言っただろうね」

「そこは否定してくれ……」

どうしよう。ウチの彼女が除夜の鐘の音で消えそうとか言っているんだけど。本当にどうしよう。というか、それで本当に消えたらマジでどうしよう。どんな顔をすればいいんだ？

「23時……そろそろ鐘が突かれ始めるわね」

「そんな……」

「ありがとう……好きよ」

そして、除夜の鐘の音……一回目の音が外から聞こえてきた。

「ぐうっ……後107回……ぐあっ……」

「……………」

一回鐘の音が聞こえる度に、苦しそうな声をあげる千聖。……除夜の鐘ってそんなに強いのか？

なんというか……年越しそばでも作るか。

「ああっ♡」

「……………」

台所でそばを作っているが……気のせいだよな？途中から嬌声が聞こえてくるんだけど……うえ、アイツ今、何してる？

「だ、ダメ……そこはダメえ……！」

……………うちの彼女が除夜の鐘の音で発情している件について。

除夜の鐘の音さんすみません。もう少し、煩惱の塊煩惱退治の力上げてくれませんか？せめて、あそこのド変態を苦しまず興奮させずにひと思いに昇天できるくらいに。

無理 ゴーン……

なんだろう。幻聴か？除夜の鐘の音さんが無理と答えた気がする。

あなたの彼女

ゴーン……

ヤバいレベルの

ゴーン……

煩惱の塊

ゴーン……

……頭がついにいったか？除夜の鐘の音さんが何かを必死に

訴えている気がする。

あれは神でも

ゴーン……

どしようもない

ゴーン……

下変態

ゴーン……

あれ？うちの彼女、除夜の鐘の音さんだけじゃなく、神様からも見放された？え？嘘だろ？そこまで末期なの？

そうだよ

ゴーン……

マジか、やべえなアイツ。

だから君が

ゴーン……

全てを受け止め

ゴーン……

受け入れるしかない

ゴーン……

若人よ

ゴーン……

全て託したぞ

ゴーン……

すみません。俺への助言はいらないので、さつきから性行為中にか聞かない声を連発し、もはやピー音くんが仕事を辞めている状態の彼女をなんとかしてください。

ゴーン……

あれ？ついに聞こえなくなったんだけど？ちよつ、無視しないで？アレをなんとかして？

ゴーン……

ヤバいな……除夜の鐘の音さんがもう仕事を放棄しちゃった。諦めちやっただよおい。

「ふっ、除夜の鐘の音……恐るるに足らずね」

「……………」

もうすぐ年を越すタイミングで、俺たちは布団の中にいた。年越しそばも食べ、明日も色々あるからそろそろ寝ることに。……何故か、うちの彼女はとでもすつきりした顔だったが、聞かないでおこう。「慧人と出会ってから思うの。私、除夜の鐘の音で消えてしまうのではないかって。煩惱の塊過ぎて」

「……………」

最初の言葉でちやっかり俺のせいにしなくて欲しい。「でも思ったの。私の煩惱は108じゃ足りないって。毎年108を超える煩惱を量産してるから消しても生き残れるのよ」

「……………」

ちげえよ。お前がド変態過ぎて、除夜の鐘の音さんが手に負えないんだよ。

「ねえ、慧人……………好き」

「……………」

「大好き……………これは煩惱でも何でもないわ。たとえば、煩惱が全てなく

なってもあなたのことが好きよ」

「……………」

おかしいな？もうなんか、彼女が言っていることを理解する気力がないぞ？俺の精神ゲージはゼロだよ。年越しを前にゼロになったよ。

「……………来年も……………こんな私だけど……………一緒に居てください」

「はあ……………居るに決まってるだろ」

「……………っ！そうね、私はあなたのものだもんね！」

抱きしめてくる彼女。ほんと、偶に千聖が可愛く思える。これがギヤップか？それとも脳が疲れすぎたのか？

「……………そろそろね。ねえ、慧人……………」

時計を確認した千聖。すると、暗闇の中、彼女は俺の上に跨がる。そして……………

「……………」

キスをした。数秒のキス。だけどその数秒は少し長く感じるようなもので……………

「あけましておめでとーございます。今年もよろしくお願いします」

「今年もよろしくな」

新年が明け、新年の挨拶をする。スマホには何件も通知が来ていて

……………

「ふふっ、キスで年越し……………去年の最後と今年の初めては頂いたわ」

「はいはい。俺は寝るぞ」

「私は返してから寝るわね」

……………こうして、俺たちの新しい年が始まったのだった。

辛いことは誰にでもある

「ねえ、花音。私、とても辛いわ」

「え？きゅ、急にどうしたの……？」

慧人が合宿に行っているとおある日のこと。千聖は親友である花音に相談をしていた。

「どうしようもなく辛いのに」

「えっと……私でよければ話を聞くよ……？」

「ありがとう」

「うん……で、辛いことって……えっと、慧人さんがいないこと？」

「そうね。もちろんそれもあるわ」

「それも……？」

「慧人がサッカーをやっていることは知っているわよね？」

「うん。サッカー部のランニングって言って、よく街中を走り回っているよね？」

「ええ。しかも代表候補に選ばれるくらいなもの。彼の身体能力も相まってきつと凄いなと思うわ」

「あはは……身体能力高いもんね……」

「どうしたの？遠い目をして」

この時、花音は思い出していた。道に迷ったとき、手を差し伸べてくれる彼の姿を。そして……その度に見せる彼の恐ろしい身体能力を。

ある時は自身を脇に抱えて、山を駆け下り。ある時は自身を背負い崖を登り。ある時は自身を肩車して屋根を飛び移り。終いにはよく分からない人たちに連れて行かれそうになれば、全員をボコボコにして救出してくれ……

（ああ……よく生きていたなあ……私）

「……大丈夫？何かあったの？」

「ううん。私ってよく生きていたなあって感心していたんだよ」

「??？」

「それで……えっと、何が辛いんだっけ……？」

「私が、アイドルとして活動しているところやバンド活動でベースを弾いているところ、後は役者として活動しているところは、慧人も見ているじゃない?」

「そうだね」

「でも、慧人がサッカーをしているところを見たことがないの」

「……………あ、確かに…………」

「でしよう?」

「うん。私も、慧人さんが大きな男の人を蹴り飛ばして、壁に激突させたところしか見てないよ」

「待って。何に巻き込まれたら、そんな現場を目撃することになるの?」

「……………色々あつたんだよお…………」

（おかしいわ。花音が慧人と関わり始めてから変なことに巻き込まれている気がする…………大丈夫かしら?）

再び遠い目をする花音。慧人の奇行はある意味彼女が一番知っているが…………それでも驚きを禁じ得ないのだ。

「それで、サッカーをしているところを見たことがない…………って話だったよね?」

「そうなの。それでね、本人に聞いたら『あー見たいなら勝手に来れば?試合の日程と場所は聞かれれば答えるけど…………』って言われたの」「じゃあ、行けばいいんじゃないの…………?」

「私、思うの」

「な、何を…………?」

「サッカーする彼を見たら、倒れるんじゃないかって?ほら、慧人って格好いいじゃない」

「そうだね…………黙って、静かに腕を組んで、目を閉じて立っていれば、普通に見えるよね…………」

「つまり、普段は格好いいと?」

「どっちかという……………災害…………?」

「なるほど。一度動き出したら誰にも止められない、ということね。流石だわ花音。よく分かっているわね」

(おかしいなあ……一応、千聖ちゃんの彼氏(仮)なんだけど……災害って褒め言葉じゃないと思うんだけど……？今更だけど……千聖ちゃんって慧人さんが関わるとバカになるよね……)

「そんな彼が活躍しようものなら、卒倒する自信があるわ」

「……つまり？」

「見に行きたいけど一人じゃ行けないのよ……」

「それを私に話すってことは……」

「一緒に行きましょう。お願い！」

「うくん……いいけど……私、ルールとかよく分かんないよ？」

「大丈夫よ。私も詳しくないわ」

「そもそも、電車使うような遠い場所が会場だったら、辿り着かないかもしれないよ？」

「多分、近場でしょう。それに遠かったら……神様が何とかしてくれるわ」

「神様って……」

「あつ、神様じゃダメね。慧人が魔王だから相性が悪いわ。どつちかというと邪神に頼むべきかしら？」

「邪神も結局神様じゃ……でも、いいの？」

「何が？」

「ほら例えば……私が慧人さんの勇姿を見て惚れる……とか考えないの？」

その言葉を口に出してからハツとする花音。思わず出てしまった言葉。恐る恐る、目の前の彼女の顔を見ると……

「今更何を言っているの？」

何を言っているか分からない、疑問を浮かべるような表情をしていた。

「既にあなたは慧人なしでは生きられないでしょう？」

「そ、そんなこと……」

と、言って彼女は考えてみる。確かに、慧人と居ると命の危険はある。しかし、慧人が居なければどうなっていたか想像してみると、果たして自分はここに居たのだろうか……と。

「……あるね」

「花音は既にこちら側なのよ。だから、心配していないわ。寧ろ……」

「寧ろ……？」

「いえ、何でもないわ。慧人の魅力は多くの人に知ってもらいたいだけなの」

「あはは……」

(何か、おかしいことに巻き込まれそうな予感がするなあ……)

貼り付けたような笑顔を向ける千聖。そこそこの付き合いになる花音には分かる。彼女がそういう笑顔を向ける時は何か裏があると
きなのだ。そして、今の話の流れからして、トラブルメーカーである
慧人関連……嫌な予感しかしい。しかも、既に彼女の掌の上で踊ら
されている感じがしている始末。

(でも、花音が堕ちてくれれば、きつと幅が広がるわね……慧人は花音
に警戒を向けることはほぼないもの)

一瞬、寒気がする花音。目の前の千聖は紅茶を優雅に啜っているだ
け。気のせい……にしておくには、あまりにもはつきりとしている感
覚。

「まあ、慧人の話はこの辺にしておきましょう。………少し寂しく
なってしまうわ」

「えつと……今日が三日目……なんだよね？」

「そうよ。だから丁度折り返しよ」

「でも、千聖ちゃんはお仕事が忙しかったりして、会えなかったことも
多いんじゃない……」

「そうね。確かに、普段も頻繁に会えているわけではないわ。でも、会
おうと思えば会えるのと、会おうと思っても会えないのでは違うの
よ」

「そつかあ……そうだね……慧人さんが居ない間は気をつけないと
……」

「気を付けて治るなら苦労していないんじゃないの？」

「うぐつ……な、なんでそんなこと言うのお！」

「ふふつ、冗談よ。でも安心して、今日はしっかり家まで送っていく

わ

「うう……ありがとう」

感謝を伝えつつ紅茶を一杯。

「そう言えば千聖ちゃん」

「何かしら？」

「少し前から、学校で噂になり始めたよ。千聖ちゃんに彼氏が出来たんじゃないかって」

「ふふっ、隠しきれないものね。アイドルという立場上、そういうことは隠しておきたかったのだけど」

(凄い嬉しそうだなあ……)

「それでね、色んな憶測が飛び交っていたみたい」

「例えば？」

「イケメンとか芸能人とか天才とかドMとかペット志願者とかメンタル鋼とか」

「後半！後半に悪意しか感じなかったわ！」

「でも多少は合っているんじゃない？」

「逆に少ししか合っていないのよ。後、慧人は天才じゃなくて天災よ」

「あはは……だから、多少訂正して、バケモノと付き合っているってこと……」

「訂正雑ね!？」

「したら、今度は『遂にバケモノを従えた……』って一歩引かれることに……」

「そこなの!？人外と付き合うことに引いたんじゃない!?」

「半分冗談だよ？」

「半分?どこから半分なの？」

「バケモノじゃなくて魔王と付き合っているって……」

「結論が変わらないじゃない!？」

「でもね、不思議なんだよ」

「何が？」

「何故かそう伝えたら、一部の人から『それって虎南高校の冬木慧人のこと?』ってなり始めたの」

「凄いわ。一周回って何で当たるのよ。あの男はどんなイメージを持たれているのよ」

「……………え？聞きたい？」

「……………なんとなく察したわ。だけど、ほんの少しだけ知りたいわね」

「えつとね、学校破壊の常習犯、警察の胃痛の種、人間に転生した元魔王……………」

「どうしたらあの男はそんな噂が流れるのかしら？」

（流石に本人が聞いたら、噂に背びれ尾びれどころの話じゃないって怒りそうね。それにしてもいくら学校が近いとはいえ、何でここまで有名なのかしら？）

それは冬木慧人だからとしか言い様がない。後は事あるごとに名前が挙がることだろうか。

「でもね、最初の6つの印象がガラツと変わって…………ドSで鬼畜な最強魔王って事で固まったの」

「当たっているから否定できないわね。というか、イメージじゃなくて、本人が言い当てられているもの」

（余りにも的確すぎて否定できないわ。後は『天災』って言葉も付けておくとなおよしね）

「そして、千聖ちゃんはその最強魔王を尻に敷いているってことで、人格化されているとか」

「あの男はそんな器じゃないわよ。あの男は束縛が大嫌いなタイプよ？」

「そうだね…………自分を縛るルールとか鎖を全部壊しそう…………」

「せめて、最強魔王の側近とか僕とか第一夫人とかがいいわ」

「勇者って言われそうだよね？」

「その称号は紗夜ちゃんにプレゼントするわ」

ただし、彼女も勇者という言葉に相応しいかと言われると、正直悩みどころではあるが、少なくとも千聖よりは相応しいだろう。

「って、また慧人の話に戻ったじゃない。今日は慧人って言葉は禁止よ禁止」

「遂に禁止ワードに認定された…………もし破ったら？」

「クラゲ禁止」

「罰が重いよお……でも、クラゲ禁止って何？」

「クラゲを見る、触れる、考えること……クラゲに関するあらゆることを禁止するわ」

「む、無茶苦茶だよお……それに元々触れたくても気軽に触れられないよお……」

「それでもよ」

「じゃあ、そう言う千聖ちゃんは慧人さん禁止ね」

「うっ……わ、分かったわ」

こうして、謎の慧人禁止縛りをした状態での彼女たちのお茶会は進んでいくのだった。